

三島由紀夫『禁色』論

—理想と現実の対立—

二七二〇六 中尾 莉奈

四〇字×三六行

目次

序	1
第一章 『禁色』における三島由紀夫	
第一節 『禁色』の評価	3
第二節 『禁色』における二人の三島	6
第三節 南悠一と檜俊輔の中の三島	8
第二章 『禁色』における対話とその影響	
第一節 悠一と俊輔	13
第二節 悠一と女たち	24
第三章 『禁色』の主題	38
結び	44
参考文献目録	46

序

三島由紀夫は、『禁色』を〈廿代の総決算〉と位置付けている。それにもかかわらず、『禁色』の作品評価は決して高いとは言えない。その理由に、主題の不明瞭さがあるのではないかと考えた。そこで、本論では、『禁色』の主題を説明していくことを目的とすることにした。では、主題説明には焦点をどこにあてて考察していく必要があるのか。そこで、作者が書いたエッセイ『禁色』は廿代の総決算』の中で語られた次の言葉を手掛かりにすることにした。

「禁色」では「仮面の告白」や「愛の渇き」とは違って、自分の中の矛盾や対立物なりの二人の「私」に對話させようとした。^(注1)

この一文は、『禁色』の特色を表している。重要なのは二人の「私」である。三島が自身を投影した二人の「私」について説明することが、主題説明に繋がるのではないかと考えた。では、その二人の「私」とは誰と誰なのか。それについて、本論の第一章で考察していきたい。現段階では、南悠一と檜俊輔であると仮定している。なぜなら、二人は外見も内面も対立するように設定されているからである。この二人の「私」について、どのような観点から考察していくのが望ましいのだろうか。そこで注目するのが、〈対話〉という言葉である。

本来、二人の「私」が〈対話〉することは不可能である。しかし、『禁色』ではそれを行おうとしている。つまり、二人の「私」が〈対話〉していることが重要なのだ。このことから、主題を説明する為に二人の「私」つまり悠一と俊輔の〈対話〉を考察していこうと考えている。

しかし、二人の〈対話〉のみを考察した時、主題説明には考察が不十分であるという印象が拭えない。そこで、もう一つの〈対話〉についても考察対象とすることにした。それが、悠一と女たちの〈対話〉である。

なぜ悠一と女たちとの〈対話〉を考察する必要があるのか。それは、女たちの変化にある。『禁色』に登場する女たちは、程度の差はあるが、それぞれに作中で変化が起こっている。その変化の原因が、悠一にあるのではないかと考えたのである。女たちの変化が本当に悠一にあるのか、あるのであれば、どのように変化を促したのか。それらを明らかにすることで、悠一の持つ特異性と本質が明らかになるのではないかと考えられる。その為に、悠一と女たちの〈対話〉を考察する必要があると考えた。

これらの〈対話〉の考察を本論の第二章において行いたいと考えている。

第三章では、第二章で悠一と俊輔、悠一と女たちの二つの〈対話〉を考察することで明らかになったことを元に、『禁色』の主題を説明していきたいと考えている。

ここで、『禁色』の成立のあり方を記述しておく。『禁色』は第一部と第二部の二部構成で執筆された。第一部は、一九五一年（昭和二十六年）の一月から同年十月まで『群像』に連載され、第一部連載終了の次号に第一部の結末を変更する「改訂広告」を載せている。その後、同年十一月十日に『禁色 第一部』として新潮社から刊行された。第二部は、一九五二年（昭和二十七年）の八月から一九五三年（昭和二十八年）の八月まで雑誌『文学界』に連載され、連載終了と同年の九月三十日に発表誌の要請から別題が用いられ『秘楽 禁色第二部』として新潮社から刊行された。のちに「三島由紀夫作品集³」に収録されるにあたり、『秘楽』の題名は抹消され、章も通し番号に改められた。第一部終了と第二部発表の間には、およそ十ヶ月の休止期間が存在している。この休止期間に、作者は朝日新聞特別通信員として初の海外旅行を経験した。

『禁色』連載開始当時、三島は二十六歳。第一部連載と同時期に『夏子の冒険』を『週刊朝日』にて連載している。この前年には『愛の渇き』を書き下ろし、『青の時代』を連載するなど、精力的に長編小説を発表している。

掲載当時から賛否両論あった『禁色』であるが、その多くは否定的な意見であった。その証拠に、『群像』昭和二十六年十一月号での合評会では『禁色第一部』について批判が多く挙がった。研究論文においては、同性愛というモチーフに注目する論文が多く発表された。比較研究の対象としては、後に発表される『豊饒の海』四部作の起源と捉えられ、『豊饒の海』を読み解く上での資料という捉えられ方をされることもあった。また、俊輔と悠一の関係性に注目し、トーマス・マンの『ヴェニスに死す』と並べられることもあった。近年では、登場する女性たちに注目する動きもあり、新たな視点での研究が進んでいる。

以上のことから、『禁色』の研究は他の三島作品と比較して不十分な印象がある。このことから、本論では『禁色』の主題説明を持って『禁色』研究の充実に貢献したいと考えている。

尚、テキストは『決定版三島由紀夫全集』（新潮社 二〇〇一年）の第三巻を使用した。

注

（注1）三島由紀夫『禁色』は廿代の総決算』『決定版三島由紀夫全集』第二十七巻

第一章 『禁色』における三島由紀夫

第一節 『禁色』の評価

三島由紀夫の『禁色』は、第一部と第二部の二部構成で執筆された。第一部は、一九五一年（昭和二十六年）の一月から同年十月まで『群像』に連載され、同年十一月十日に『禁色 第一部』として新潮社から刊行された。第二部は、一九五二年（昭和二十七年）の八月から一九五三年（昭和二十八年）まで雑誌『文学界』に連載され、連載終了と同年の九月三十日に『秘楽』として新潮社から刊行された。第一部と第二部を執筆する間には、およそ十ヶ月の休止期間が存在している。この休止期間に作者は、朝日新聞特別通信員として初の海外旅行を経験した。

『禁色』は、『仮面の告白』を代表とする三島の同性愛を扱った小説の一つである。三島は『仮面の告白』で同性愛者である少年（のちに青年）を描いた。その為、二つが同じ系統の作品だと考えられる場合もある。しかし、『仮面の告白』で描かれたのは、一人想像の中で同性愛に耽溺する少年であった。一方の『禁色』で描かれたのは、男色の秘密社会の現実だった。また、その内容から『禁色』は同性愛が社会秩序に対するプロテストであるように見せた。

『仮面の告白』とは異なった表現で同性愛者を描いた『禁色』以降、三島は同性愛を前面に出した作品を書かなくなった。その理由を探る上で『禁色』は廿代の総決算」というエッセイの存在は軽視できない。このエッセイで三島は次のように語っている。

「禁色」でもつてぼくは今の二十代の仕事を総決算しようと思ふ。青春といふものの悪いところもいいところも、いはば少年時代の大人になりたい気持、それと今やまさに少しづつぼくに解りかけてゐる若さの意味とを、その二つのもの相交つた上に、ぼつぼつと書いてきた習作時代といふか、遍歴時代といふか、その記念として、形にまとめてみたい。^(注1)

三島にとって『禁色』は、二十代、青年期の総決算という位置付けだったのだ。その『禁色』と共に『仮面の告白』そして『愛の渴き』を三島は同書で次のように位置付けている。

自分の仕事として後に残りさうなのは、自分の長所も欠点もさらけ出したといふ点で、「仮面の告白」「愛の渴き」「禁色」の三長篇を自分の本当の仕事^(注2)と思つてゐる。

この三長篇の内の『禁色』と『仮面の告白』で、三島は同性愛というモチーフを描くという作業に一つの区切りがついたと考えたのだろう。その結果、『禁色』以降は同性愛を前面に出した小説を書かなくなったと考えるのが妥当だろう。

以上のことから、『禁色』は三島の転機となった作品であることがわかった。では、そのような重要な作品である『禁色』は、どのような評価がなされたのだろうか。続いて、『禁色』の評価についてまとめていくこととする。

『禁色』に対して、三島の尊敬する川端康成は、昭和二十六年八月十日附の三島宛の手紙で「禁色は驚くべき作品です」と語っている。また、二年後の昭和二十八年二月十五日付の三島宛の手紙では「今月の文藝界は、新しい少年のところ、少しはつきり書きすぎではないでせうか^(注4)」と言及している。川端以外にも『禁色』について言及している人物は多く、執筆当時から批判的な意見も挙がった。奥野健男氏は『三島由紀夫論』で「理想的な美の形成という意図を、『禁色』『秘楽』において実現しようと企てた。」^(注5)作品と捉えている。しかし、その結果については以下のように述べている。

出来上がったものは、完全な失敗作——虚しい意図を支えるために動員された彼のあらゆる才能と手腕との膨大な無意味な集積——であった。^(注6)

このように「完全な失敗作」と述べたのには、作者の目指すものと作品が与える印象に違いが生じているからだと言う。では、奥野氏が考える作者の目指すものとは何か。それについて次のように同書で述べている。

ここで作者のめざすものは、悠一の肉体の完璧な美の勝利であり、また作品そのものも悠一の肉体のような、明晰でかげりのない、何らの罪の意識も、劣等感もない、ギリシヤ的な調和の美しさに造りあげることがあった。^(注7)

三島が『禁色』で表現するべきは「完璧な美の勝利」であると考えた奥野氏だったが、『禁色』からはそれとはかけ離れた印象を受けたという。以下からその詳しい印象について引用する。

ところが、作者の意図に反し、悠一や作品から受ける感じは、美とは全く逆の嫌らしさみじめさである。美しさが全くないこの作品は、そらぞらしい虚しさに

満ちていて、どうして作者がおびただし才能と労力をついやしてこのような作品を書くのか、その必然性さえ感じられなくなる。^(注8)

奥野氏は、作者が書こうとしていた意図とは逆の印象を作品が持つてしまっていると感じたのだ。作品の印象の悪さが「完璧な失敗作」という意見に繋がったのだろう。

奥野氏のように、作品の印象に対して批判的な意見は多い。柴田勝二氏は『三島由紀夫——魅せられる精神』の「魅せられる者と魅せられない者——『禁色』における転換」において、『禁色第一部』の連載が完結してまもなく、『群像』昭和二十六年十一月号での合評会で『禁色第一部』について批判が挙がった様子が書かれている。

椎名麟三は「小説そのものが男色に圧倒されちゃってる」という印象を語り、男色という主題を現実世界に対する「プロテスト」として評価する花田清輝も、^(注9)「デイズニー映画の美男美女みたいなのが登場すること」に不満をもらしていた。

『禁色第一部』が完結して間もなくからこのように批判が起こっていたが、『禁色』全体が刊行されてからも、このような批判が続いていたという。その一部を同書でまとめているので、以降から引用する。

本多秋五氏は『物語戦後文学史』（新潮社、昭41・3）で、主人公が完璧な美青年として描かれているにもかかわらず、その像が「さっぱり読者の眼前に浮かんで来ない」という不満を述べている。またマルグリット・ユルスナールもこの作品を乱暴に書きなぐられた「ルポルタージュ小説」であると見なし、やはり素材によって読者を驚かせようとする作者の計算を見て取っていた。^(注10)

このように、『禁色』には数多くの批判的意見が挙がった。いずれも、作者の表現しようとしているものが他の何かに消されてしまっていることに対する批判だと言える。中でも椎名氏の批判は、男色というモチーフ故にそこばかりが目立ってしまい、本質的な部分が印象に残らないことへの批判である。しかし、本当に作品の本質的な部分が霞んでしまっているだろうか。次に、『禁色』の肯定論のひとつである埴谷雄高氏の「『禁色』を読む」の要点を同書より引用する。

『禁色』を「悲痛な作品」と捉え、「青春の自己保存と憧憬のイロニーを、この

上なく誠実に扱った作品」であるという評価を与えている。(中略)悠一が同性に惹かれながらも、男色に耽溺することのできない人物であることを的確に指摘している。^(注11)

注目すべきは、後半の「悠一が同性に惹かれながらも、男色に耽溺することのできない人物であること」という部分である。男色ばかりに目が行きがちな『禁色』ではあるが、その実、悠一は決して男色に溺れることはなかった。それは、柴田氏が言うように『禁色』は決して男同士の〈同性愛〉を主題として描いた作品ではない。^(注12) ということの証ではないだろうか。男色は、いわば三島らしさの表れであって、主題そのものにはなりえない、手段と言いつい換えられるものなのだ。

このように、『禁色』の評価をまとめていくことで、『禁色』の問題点が明確になった。それは、『禁色』の主題、本当に描きたかったことは何であつたかということだ。伝えなかったであろう内容が不明瞭なままでは、作品の本当の評価など下せない。そこで、本稿は『禁色』の主題の解明を最大の論点とすることとする。では、『禁色』の主題を解明するには、どの点を考察しなければならぬのだろうか。以降から、『禁色』の主題を解明する際に明確にすべき点について考えていく。

第二節 『禁色』における二人の三島

『禁色』の表現方法の特色とは何だろうか。まず、三島が考える『禁色』執筆理由について引用する。

「禁色」では「仮面の告白」や「愛の渴き」とは違って、自分の中の矛盾や対立物のなりの二人の「私」に對話させようとした。^(注13)

ここで言う〈二人の「私」〉は三島の分身であり、『禁色』を読み解く上でキーパーソンと言えるだろう。

では、『禁色』における〈二人の「私」〉とは、誰と誰か。そもそも、三島は「自分の中の矛盾や対立物」を一人に投影させている筈である。つまり、正反対の性質を持ちながらも、どこか重なる部分がある二人でなくてはならない。このように考えていくと、自ずと〈二人の「私」〉が浮かび上がってくる。それが、「南悠一」と「檜俊輔」である。

南悠一と檜俊輔が三島の分身であると考える前に、一つ確認しておく必要がある。それ

が登場人物たちのモデルについてである。丹尾安典氏は「いわねばこそあれ——男色の景色」で田中純夫氏の「小説『禁色』のモデル」(『人間探求』昭和二十八年五月)を引用して俊輔のモデルについて言及している。

田中純夫は「小説『禁色』のモデル」(『人間探求』昭和二十八年五月)のなかで、この小説家を、十歳余り年のひらきはあがあるが、三島と師弟関係にあった「＼K」という作家」がモデルではないかとしている。そして、「＼K」という作家の「少年」という作品の冒頭の一節」まで引用されているから、＼K」が川端康成を指していることはあきらかである。むろん、田中が言うように、「そこに描写がされている総てを、事実としてとるわけでもない」にせよ、「作者の、イメージの足がかりとして、作家の面影」はやはり反映されているのだろうと思う。^(注14)

このように、俊輔にはモデルがいたという説もある。例えその説が真実であったとしても、あくまで参考にしたという程度であろう。作品を読んでも、俊輔が川端をそのまま描いた人物とは言いづらい。では、なぜ川端そのままではなかったのだろうか。その理由を明確にするために再度『禁色』は廿代の総決算」の一文に注目する。

「禁色」では「仮面の告白」や「愛の渇き」とは違って、自分の中の矛盾や対立物^(注15)なりの二人の「私」に對話させようとした。

再三述べたように、俊輔はここで言う三島の「矛盾」等を元に生まれた人物である。例えモデルが居たとしても、モデルそのままを描いては、「私」が投影された俊輔にはならない。悠一のモデルとされている青年についても同様の手法が用いられているのだろう。

以上のように、悠一や俊輔を作る上でモデルが居たとしても、三島の「矛盾や対立物」が込められている限り、二人の「私」であることは明白である。

ここまで、二人の「私」について注目してきた。それは、『禁色』を読み解く上でキーパーソンだからである。それに加えて、先に引用した『禁色』は廿代の総決算」から、もう一つ注目したい部分がある。それが、「對話させようとした」という部分である。本来なら對話することの出来ない部分が、二人の登場人物にそれぞれ分けることで、別個のものとして存在し對話が可能になったのだ。先に述べたように二人の「私」が『禁色』に託ったのキーパーソンであるなら、〈對話〉はキーワードと言えるだろう。

以上のことから、悠一と俊輔の二人の〈對話〉を考察することが、『禁色』を読み解く上

で重要だとわかった。しかし、『禁色』では多くの〈対話〉が行われている。果たして、悠一と俊輔二人だけが〈対話〉しているのだろうか。続いて、『禁色』内で行われている〈対話〉の種類、対話している人物たちについて考えていく。

先に挙げたように、悠一と俊輔の対話。二人の「私」の対話がある。勿論、二人とも他の登場人物との対話も存在する。つまり、二人の対話に加えて、それぞれがお互い以外と交わした対話も存在するということだ。登場人物が複数居る場合それは当然である。しかし、ここで挙げるのは、あくまで『禁色』の主題を解明するのに重要な対話だ。そこで、本稿で考察する対話は、〈悠一と俊輔の対話〉と〈悠一と女性との対話〉の二つに絞ることとする。

では、なぜこの二つの対話に絞るのか。後に考察していくが、作中の対話によって登場人物たちに何らかの影響を受け、変化が生じている。その中でも、悠一が与える影響は大きい。例えば、第一章で悠一の美しさによって俊輔に変化が生じたといった具合である。この事実から、『禁色』は悠一の与える影響こそが重要なのではないかと考えた。つまり、変化の原因である悠一の〈対話〉を考察することこそ、『禁色』を読み解く上で必要なのだと考えたのだ。

考察する対話が明確になったところで、もう一つの問題について考える必要がある。それが、悠一と俊輔それぞれに三島のどのような「矛盾や対立物」が投影されているのかという問題だ。「自分の中の矛盾や対立物」とは具体的に言い換えるならば何か。それが明確になれば、悠一と俊輔の対話においての本来の意味は見出せないだろう。その為には、三島自身がどういった人物だったのか。悠一や俊輔はどういった人物として描かれているのか。これらを明確にする必要がある。そして、それらを明確にした後、それぞれの関係性を考えることも必要だ。そうして初めて、悠一と俊輔二人の対話を考察する本当の意義を主張できるだろう。

以上の理由から、次節で三島の人物像及び悠一と俊輔の人物像をまとめていく。それにより、三島と悠一、三島と俊輔、それぞれに投影された三島を明らかにしていく。更には、悠一と俊輔の関係性について明確にしていくこととする。

第三節 南悠一と檜俊輔の中の三島

ここでは、悠一と俊輔それぞれの中に投影されている三島について考察していく。その前に、三島由紀夫とはどういった人物だったのかについて、『禁色』執筆までを年表に沿ってまとめていく。

三島由紀夫、本名平岡公威は、一九二五年（大正十四年）一月十四日に生まれた。出生地は、東京市四谷区四丁目二二番。一階が祖父母、二階が両親の住まいになっていた。同年三月三日、二階で赤ん坊を育てるのは危険だという理由で、祖母・夏子が公威を自室で養育するようになった。一九三〇年（昭和五年）一月に自家中毒になる。自家中毒により危篤状態になった公威は、危険な状態だったものの幸い一命をとりとめた。その後、自家中毒は小学校入学の頃まで月に一回の頻度で続くこととなり、そのたびに入院していた。このように虚弱だった作者は、逞しい身体に強い憧れを抱くようになる。

成長し学習院に入学してからは執筆活動を開始するようになる。その時執筆された作品は機関誌「輔仁会雑誌」に投稿された。この機関誌「輔仁会雑誌」とは、「白樺」同人として活躍した武者小路実篤、志賀直哉、木下利玄、有島壬生馬、長与善郎らも投稿した。^(注16)雑誌である。ここに、公威は中等科に入ると詩を投稿し発表し始めた。また、それを期に高等科三年の坊城俊民と「創作した詩や互いの詩の批評、読んだ本の感想などを綴った手紙を毎日のようにやりとりすることになる。」^(注17)が、これより前の一九三一年（昭和六年）にも、短歌一首、俳句二句が「小ざくら」に掲載されていた。この「小ざくら」とは、次のような雑誌である。

《小ざくら》は、大正十五年十一月に創刊された学習院初等科の機関誌で、夏休みの自由研究や綴方、短歌、俳句、童謡などを載せた。初等科学生だけでなく、教師から学校の様子を家庭に知らせる文章も掲載。公威が初等科学生の頃は、年一回の発行。^(注18)

世間に発表されているわけではないが、この学内の機関誌に中等科に進学するまで詩、短歌、俳句が毎号に掲載されることとなる。

このように少年期から公威はその才能を発揮していた。その後、一九四一年（昭和十六年）に「花ざかりの森」を「文芸文化」九月号から一二月号まで四回にわたり連載。このとき初めて《三島由紀夫》のペンネームを用いた。この「花ざかりの森」で蓮田善明に絶賛される。一九四四年（昭和一九年）に東京帝国大学法学部法律学科独法に入学。卒業後、一九四七年（昭和二二年）に高等文官試験に合格し、大蔵省に入省。大蔵事務官に任命され、銀行局国民貯蓄課に勤務することとなる。しかし、翌年退職し職業作家となった。その三年後の一九五一年（昭和二六年）の一月に『禁色』の連載が開始された。『禁色』執筆までの三島（公威）の軌跡は以上である。

ここからは、三島が「廿代の総決算」として執筆した『禁色』に登場する南悠一について挙げていく。なお、ここでは悠一の特徴を挙げていくに留め、具体的な考察は第二章に

て行うこととする。

悠一と言えば、その美しさが最大の特徴である。「それは愕くべく美しい青年である。」と俊輔が語っていることからわかるように、誰もが絶賛する程の美貌である。悠一を見かけた俊輔は次のようにも語っている。

あれこそは青年のあらゆる美の持主であり、人生の日向の住人であり、芸術などといふ毒に決して染まらず、女を愛し女に愛されるやうに生れついた男だ。(第一章)

この時点では、悠一は俊輔から見ても完璧な男である。しかしその直後、悠一の代名詞とも言える性質が露見する。次にその悠一の告白を引用する。

「先生ならわかっていただけだと思いますが、僕は女を愛せません。わかりますか。僕の体は女を愛することもできるけれど、僕の感情はただ精神的なものにすぎません。僕は生れてから、女をほしいと思つたことがなかつたんです。女を前に置いて、欲望を感じたことがなかつたんです。それなのに僕は自分をだまし、何も知らない女の子をだましたんです」(第一章)

このように、悠一は「女を愛せない」存在である。「女を愛し女に愛される」と思われていた悠一だったが、実際は「女を愛せない」という苦悩を持った存在だった。

もう一つの特徴はナルシズムである。「女を愛せない」のであれば、同性を愛すると考えるのが自然である。勿論、悠一は自分の意思で男性と関係を持つていくのだから、同性愛者であると言えよう。しかし、「これほど数多い同類の中に、自分以上の美貌を見出さなかつた」というように、自分以上に愛せる相手を同性にも見出していなかった。このことから、悠一はナルシズムを持った人物だと言えるだろう。

続いて、もう一人の「私」俊輔の特徴について挙げていく。

俊輔は六十六歳の老作家である。特徴である彼の顔は醜く、次のように形容された。

すべての造作に、精神が携はつた永い労働の跡が歴然としてゐた。しかしそれは精神によつて築かれた顔といふよりは、むしろ精神によつて蝕まれた顔である。この顔には精神性の或る過剰が、精神性の或る過度の露出があつた。恥部を露はに語つてゐる顔が醜いやうに、俊輔の醜さには、恥部を隠す力を失つた精神の衰へた裸体のやうな、一種直視の憚られるものがあつたのである。(第一章)

俊輔は精神性の塊と言える人物である。精神の過剰さにより顔が蝕まれた俊輔は「醜い」としか言ひやうのない」顔を持つに至ったのだ。

俊輔を語る上で欠かせないのが女性との関係である。その内容は次のように語られている。

三度の結婚の蹉跎、それよりも十数回の恋愛のぶざまな結着、……女に対する絶ちがたい憎悪に悩まされつづけた（第一章）

幾度となく女性との関係で辛酸を嘗めてきた俊輔は、それに比例するように女性への憎悪を膨らませていった。

続いて、悠一及び俊輔に投影された三島の性質について、二人を対立させながら考察していく。

まずは年齢である。執筆当時の三島は悠一と同年代であり、当時の三島を投影していると言えるだろう。逆に、俊輔は後の三島、将来作家となった時の自分を想像し、それを投影している。つまり、現在の自分と将来の自分の対立である。

次に容姿。こちらは、三島の理想とする美しい容姿を持つのが悠一で、三島が現実で生来なると考えられる醜い容姿が俊輔である。この場合は、理想の自分と現実の自分の対立である。これは、精神性においても同様である。悠一は精神性が皆無であり、それとは逆に俊輔は精神性の塊である。三島は精神性を持たない美しい青年という理想を悠一に投影しながら、俊輔に自身の持つ精神性を投影した。

このように、悠一と俊輔に三島自身の現在と未来、理想と現実を投影することで、二人の「私」を対話させようと考えたのだ。

悠一と俊輔に投影されている三島について明確になったところで、次章からは二人の〈対話〉を本文に即して考察していくこととする。

注

- (注1) 三島由紀夫『禁色』は廿代の総決算』『決定版三島由紀夫全集』第二十七卷
新潮社 二〇〇一年二月 四七五頁
- (注2) 前掲 三島由紀夫『禁色』は廿代の総決算』四七四頁
- (注3) 川端康成記念會『川端康成全集』補卷二 新潮社 一九八四年五月 三三六頁
- (注4) 前掲 川端康成記念會『川端康成全集』補卷二 三三六頁
- (注5) 奥野健男「三島由紀夫論」『日本文学研究資料叢書 三島由紀夫』有精堂出版
一九七二年七月 四三頁
- (注6) 前掲 奥野健男「三島由紀夫論」四三頁
- (注7) 先掲 奥野健男「三島由紀夫論」四四頁
- (注8) 先掲 奥野健男「三島由紀夫論」四四頁
- (注9) 柴田勝二『三島由紀夫——魅せられる精神』おうふう 二〇〇一年十一月
一一八頁
- (注10) 前掲 柴田勝二『三島由紀夫——魅せられる精神』に拠る 一一八頁
- (注11) 先掲 柴田勝二『三島由紀夫——魅せられる精神』一一八頁
- (注12) 先掲 柴田勝二『三島由紀夫——魅せられる精神』一一八頁
- (注13) 先掲 柴田勝二『三島由紀夫——魅せられる精神』四七五頁
- (注14) 丹尾安典「いわねばこそあれ——男色の景色」『新潮』第一〇五卷二月号
新潮社 二〇〇八年六月 二二四頁
- (注15) 先掲 三島由紀夫『禁色』は廿代の総決算』四七五頁
- (注16) 佐藤秀明『日本の作家100人 三島由紀夫——人と文学』勉誠出版
二〇〇六年二月 四二頁
- (注17) 前掲 佐藤秀明『日本の作家100人 三島由紀夫——人と文学』三三三頁
- (注18) 佐藤秀明・井上隆史・山中剛史『決定版三島由紀夫全集』第四十二卷 新潮社
二〇〇五年八月 二二—二三頁

第二章 『禁色』における対話とその影響

第一節 悠一と俊輔

第一章で指摘したように、『禁色』では〈対話〉が物語に大きく関わるキーワードとなっている。第二章第一節では、〈対話〉場面の中でも重要な悠一と俊輔の対話を中心に考察していく。なお、ここでの〈対話〉とはどちらか一方でも相手の存在に対して言及しているものも含むこととする。

まず、俊輔が悠一を見とめた場面から俊輔の心情の変化について考察していく。

俊輔は、悠一を最初に見かけた際に「それは愕くべく美しい青年である。」という一文から丹念にその肉体美について語っている。これは、悠一への興味の表れである。その理由について、本文で俊輔は次のように語っている。

……檜俊輔は世の美しい青年の悉くを憎んでゐた。しかし美は無理無体に彼を黙らせた。一つには美と幸福とを忽ち結びつけて考へる悪癖があつたので、彼の憎悪を黙らせたのはこの青年の完璧な美ではなくてこの青年が持つてゐるものと思量される完璧な幸福であつたのかもしれない。(第一章)

俊輔が悠一に目を奪われたのは、悠一が持つているであろう「完璧な幸福」であつた。このこと自体は俊輔にとって然程珍しいことでは無かつた。しかし、悠一には特に惹かれていたことが、次の一文でわかる。

賛美の念と嫉妬と敗北感との異様な混淆を味はつたのは、このやきもちの手だれにとつて珍しいことではなかつたが、この場合俊輔の心は康子よりもむしろあの世に稀な美しい青年の上へ膠着してゐたのである。(第一章)

康子を追つて来ているながら、瞬時に悠一へ膠着した俊輔は、『今度といふ今度は俺も安心して敗けられるな』と考えた。その「悉く憎んでゐた」筈の「美しい青年」を前に、俊輔は次のように考えを改めている。

『あれこそは青年のあらゆる美の持主であり、人生の日向の住人であり、芸術などといふ毒に決して染まらず、女を愛し女に愛されるやうに生まれついた男だ。あれなら

安心して手を引ける。むしろ俺は進んで譲りわたさう。美と永いこと戦って来た生涯だったが、そろそろ最後の和解の握手を美と取り交はしてもいいころだ。天がそのためにあの二人を俺の面前に送ったのかもしれない』(第一章)

この語りで、悠一との出会いが俊輔の生涯を掛けて戦った美とすら「最後の和解の握手を美と取り交はしてもいいころだ。」と思わせたのだ。この瞬間、悠一は俊輔にとって特別な存在になったと言えるだろう。しかし、ここまでで二人は一切会話を交わしていない。つまり、「美と永いこと戦って来た」老作家の心境を変化させたのは、存在そのものなのである。俊輔に影響を与えたのは悠一の肉体の美しさであり、持っているであろう「完璧な幸福」であった。このような変化が起こった俊輔を、田中美代子氏は次のように捉えている。

檜俊輔は、美貌と回春を志して、身代わりの人形づくりに心血を注ぐ。作家とは、もともと存在しないものの美学に命を賭ける呪われた人である。^(注1)

悠一と出会ったことで、俊輔は「身代わりの人形づくりに心血を注ぐ」ようになり、やがて悠一を愛し始めるのである。

「女を愛し女に愛される」完璧な存在であると思われた悠一であったが、俊輔の客室に悠一がやって来たことで事態は急変する。以降から、悠一が俊輔の宿の部屋に来た時点から俊輔が契約を提案するまでのやり取りについて本文を引用しながら考察する。

海辺で出会ってから康子を含めて三人で食事を取った後、悠一は俊輔の元へやって来た。しかし、悠一の様子は昼とは違い「その暗い瞳には憂ひの色が昼よりも深ま」っていたのだ。これに気づいた理由を俊輔は「作家の直感で打ち明け話があることを察した。」と語っている。すると、それを証明するように「青年が早く言つてしまはねばと焦慮してゐる様はますます露はになった。」ので、俊輔はその「打ち明け話」を聞くこととした。その打ち明け話の内容が次の悠一の台詞である。

「先生ならわかっていただけと思ひますが、僕は女を愛せないんです。わかりませんか。僕の体は女を愛することもできるけれど、僕の感情はただ精神的なものにすぎないんです。僕は生れてから、女をほしいと思つたことがなかつたんです。女を前に置いて、欲望を感じたことがなかつたんです。それなのに僕は自分をだまし、何も知らない女の子をだましたんです」(第一章)

この台詞は「僕は女を愛せないんです。」という部分に目が行きがちだが、注目すべきは「先生ならわかつていただけると思ひますが」と言っている部分である。なぜ悠一は「先生ならわかつていただけると思ひますが」と言ったのだろうか。勿論、悠一が俊輔の人となりを知っているわけではない。つまり、この「先生ならわかつていただけると思ひますが」を言い換えるのならば、「先生にはわかつていただきたいのです。」という懇願なのではないだろうか。では、なぜ懇願してまで「打ち明け話」をしたいと悠一は思ったのだろうか。その理由を悠一は次のように語っている。

今しがたまでの打ち明けたいといふ衝動の狂ほしきは論外であつた。何事もなかつた三晩の苦しさが悠一を爆發させたのである。(第二章)

このように、誰かに自身の秘密を打ち明けたいと強く思っていた悠一にとって、俊輔の登場は待ちに待ったものだった。

では、俊輔に秘密を告白した結果、悠一にどのような心境の変化が起きたのか。次に、打ち明けたことで起きた悠一の感情の変化を表現している箇所を引用して考察する。

生まれてはじめて秘密を打ち明けたこの相手に今や秘密の凡てを売り渡すことに、悠一は自分自身に対する背信の喜び、憎むべき主人にこき使はれてゐる苗売りがたまたま好ましい客に行き会ってありたけの苗を捨値で売つてしまふやうな裏切りの喜びをも感じたのである。(第二章)

最初の「生まれてはじめて秘密を打ち明けたこの相手」は勿論俊輔のことである。出会ったばかりの俊輔に、悠一は秘密に関する全てを打ち明けることに喜びを感じている。その理由が「自分自身に対する背信の喜び」であり、「憎むべき主人にこき使はれてゐる苗売りがたまたま好ましい客に行き会ってありたけの苗を捨値で売つてしまふやうな裏切りの喜び」である。

前者の「自分自身に対する背信の喜び」とは何か。それは、「生まれてはじめて秘密を打ち明けた」ことで、今まで頑なに秘密を守ってきた自分を裏切ることへの喜びである。俊輔に秘密を告白する前の悠一は、家族や康子に秘密を打ち明けなかっただけでなく、自身の心にも秘密を肯定させなかった。その様子がわかる箇所を次に引用する。

純潔の奇妙な理論によつて、悠一はこの少年が彼を愛してゐることを察知してゐた結果、この少年を愛してはならないと心に決めてゐたのである。(第二章)

悠一は、例え自分に好意を寄せている同性に気づいたとしても、それに答えることはなかった。この精神の取り決めに忠実に守る程秘密について自分にも厳しかった悠一が、俊輔に秘密を打ち明けた。これこそ「自分自身に対する背信」である。悠一は今までの自分を裏切ることを感じたのだ。

では、後者の「憎むべき主人にこき使はれてゐる苗売りがたまたま好ましい客に行き会つてありたけの苗を捨値で売つてしまふやうな裏切りの喜び」とは何か。大凡の意味は先に述べた「自分自身に対する背信の喜び」と同じであろう。しかし、「憎むべき主人」と「好ましい客」という言い方で、「憎むべき主人」という名の自分自身の精神の取り決めに裏切られるだけでなく、「好ましい客」という名の俊輔に出会つたことに喜びを感じたと言いたかつたのではないだろうか。先にも引用したが、告白時の悠一は「今しがたまでの打ち明けたといふ衝動の狂ほしさは論外」といった心境であつた。そんな悠一の告白に対して「興味ばかりか憧憬をさへ寄せて」来た俊輔は、悠一にとつて「好ましい客」そのものだつた。つまり、この悠一の主張は、今まで秘密を隠していた自身への裏切りであると同時に、俊輔を信頼する気持ちの芽生えを言いたかつたのだ。

悠一が同性愛者であると俊輔に伝えた後の対話において、悠一は自身への認識を改めることになる。それは、悠一が自身の美しさを認めるようになったというものである。

では、悠一は何をきっかけに自身の美しさに気づいたのか。まず、その時の状況を本文から読み取ることとする。

悠一の顔のむかふところに、たまたま漆黒の鏡台があつた。丸い鏡面はその前を通つた人の裾に煽られたか、やや仰向きの角度をもつて悠一の顔をまともに映してゐた。

話しながら自分の顔が自分を時折見据ゑるようになるのを悠一は感じた。(第二章)

端的に言えば、鏡に映つた自分の顔を悠一が見ているという状態である。なぜ「顔を見る」ではなく、「見据ゑる」という表現になつたのか。それは、悠一が自身の美しさに気づく予兆だつたからだと考えられる。続いて、悠一が自身の美しさについて語っている箇所を所引用する。

そのあひだ悠一は灯下の鏡のなかから自分を見つめてゐる一人の美しい青年の面差

に気をとられてゐた。その深い憂はしい目は俊敏な眉の下からじつと彼のほうへ瞠か
れてゐた。

南悠一はその美しさに神秘を味はつた。これほど青春の精気に充ち、これほど男ら
しい彫琢の深みを帯び、これほど青銅のやうな不幸の美しい質量をもつた青年の顔が、
彼なのであつた。(第二章)

この「美しい青年」や「不幸の美しい質量をもつた青年」とは、悠一自身のことである。
ここで、悠一本人が自身の顔を「美しい」と称したのだ。なぜこの部分に注目するのかと
言うと、この対話の前の悠一の認識に起因する。それが分かる箇所を次に引用する。

今まで悠一は自分の美を意識することに嫌悪を感じ、愛する少年たちの絶えず拒んで
ゐるかのやうな彼岸の美に絶望を感じてゐた。男性一般の習慣に従つて、悠一は自分
を美しいと感ずることを自ら禁じた。(第二章)

この対話以前は、悠一自身「男性一般の習慣に従つて、悠一は自分を美しいと感ずるこ
とを自ら禁じ」ていたのだ。気づいていなかったのではなく禁じていたそれを、なぜ肯定
するに至つたのか。その理由を悠一自身が本文で次のように語っている。

しかし今目前の老人の熱情的な贅辞が彼の耳に注がれるにつれ、この芸術的な毒、こ
の言葉の有効な毒は、永きに亘つたその禁を解いたのである。彼は今や自分を美しい
と感ずることを自分に許した。そのとき、悠一はこれほど美しい彼自身をはじめて見
たのである。小さな丸い鏡面の中からは、見知らぬ絶美の青年の顔が立ち現はれ、そ
の男らしい唇は白い歯列を露はして思わず笑つた。(第二章)

俊輔による「熱情的な贅辞」であり「芸術的な毒、この言葉の有効な毒」が、悠一に自
身で作つた取り決めに破らせた原因である。悠一の中の禁忌を、俊輔の言葉が解いたので。
この場面の悠一の変化について、谷口美紀氏は次のようにまとめている。

まさに神話通りと言ってよいナルシスの出現である。俊輔という鏡の介在を得たこ
とで、悠一は自分の顔を知り、その顔を恋うるナルシスになつた。^(註)

このように、俊輔の存在が悠一に変化の切っ掛けを与えたことは明白である。そして、

この二人の対話の後直にやって来た康子も、その変化に触れることとなる。

彼女はそこに魅するやうな若者の微笑の美しさを見た。意識が悠一の微笑を変へてゐた。今ほどこの青年が光りを放つやうな美を湛へてゐる刹那はなかった。(第二章)

悠一の意識が変化することで、その変化が「微笑」となって表に現れたのだ。そして、この変化を見た俊輔は、悠一が自分の意のままになる確信を得る。その確信を裏付けるように悠一は俊輔の提案を受け入れ「自分が結婚の決心をしつつあることを感じた。」と心を決めていた。

以上のように、第一章、第二章での対話によって、悠一や俊輔に大きな変化が生じたことは明らかである。第一章、第二章の二人の対話で、俊輔は復讐の道具を得、悠一は自身の奥底に眠っていた性質を開花させたのだ。

ここまで考察した第一章、第二章の対話の後に二人が対話するのは第五章でのことである。ここからは、第五章での二人の対話について考えていく。ここでの対話は、悠一が実際の男色社会を経験してからの対話である。第一章、第二章の俊輔との対話の後に「微笑」という形で変化が表に現れた悠一であったが、次の第五章での対話で見せたのは「満ち足りた幸福さうな笑顔」であり「素直な笑顔」であった。それらの「笑顔」を見せた場面を次に引用する。

あくる日俊輔の家へあらはれた悠一の満ち足りた幸福さうな笑顔は、まつさきに俊輔を、次に悠一に会わせるために招いたあつた女客を不安にさせた。

(中略)

彼が何の反撥も示さずに素直な笑顔のままこれに応へてゐるのを見て、老作家はわが目を疑つた。その俊輔の困惑した顔付には、詐欺にかかつたと知りながら体面をつくるふふ男の愚かしさがあらはれてゐた。(第五章)

これらの笑顔に俊輔は「困惑した顔付には、詐欺にかかつたと知りながら体面をつくるふふ男の愚かしさがあらはれ」るほどの動揺を見せた。そして、動揺する俊輔を見た悠一は、次のように述べている。

はじめていささかこの御大層な老人を軽蔑した。そればかりか、五十万円の詐欺犯人のようなよろこびを空想して愉しんだ。(第五章)

このように、俊輔に対する評価が変化していることがわかる。その原因を、悠一は自身で次のように考えている。

『もし僕の言ったことがみんな嘘で……』と美青年は多少好い気な明朗さを以て考へた。『……事実僕が康子を愛してゐて、金の算段に困つたあげく、このお人好しの小説家を相手に一ト狂言打つたのだと仮定したら、僕は今どれほど快い立場にあることだらう。僕は鼻をうごめかし、自分の快適な別荘のやうな幸福が、悪意の墓地の上に建てられてゐることを誇るだらう。僕は生まれてくる子供たちに、食堂の床下に埋もれてゐる古い人骨の話をかかせてやるだらう』

今では悠一は告白といふものに免かれがたいあの過度の誠実を自分に恥ぢてゐた。昨夜の三時間が彼の誠実さの実質を変へたのであつた。(第五章)

悠一は、結婚生活を送る間「俊輔の言葉を護符を念ずるように暗誦した。」と言うほどに俊輔に信頼を寄せていた。しかし、第五章においては「告白といふものに免かれがたいあの過度の誠実を自分に恥ぢてゐた。」と考えている。これは、悠一から俊輔への信頼の薄れであり、催眠術に掛かったように俊輔へ傾倒していた悠一が、その催眠術から覚め始めたことの証拠である。

悠一から俊輔への信頼の薄れは、俊輔に不安を与えた。その結果、俊輔は悠一に次のやうな疑問を投げ掛ける。

結婚の首尾がよかつたので、女を好きになつたのぢやあるまいね、と疑り深い老人は詮索した。(第五章)

ここで注目するべきは、「疑り深い老人は詮索した。」という部分である。第一章、第二章での対話において、自身の意見を主張するだけだつた俊輔が、「女を好きになつたのぢやあるまいね」と悠一に尋ねている。この第五章での対話は、それまでの対話とは違い対話中に悠一が何かに目覚めた訳では無い。悠一の態度が変わつたのは英ちゃんとの行為であり、男色社会が原因であつた。では、対話中に起こつた変化とは何か。それが「疑り深い老人は詮索した。」という部分である。この一文で、俊輔が悠一に執着し始めていることを表しているのだ。勿論、ただ復讐の失敗を恐れて確認しただけとも考えられる。その疑念を晴らす為に、続いて第九章での二人の対話を考察していく。

もともと俊輔は「死人」のような男であった。それは、第六章で悠一が「他人の目で俊輔を眺め」た際に、俊輔が生きながら「死人」であると言ったことでもわかる。その為、「死人」である俊輔は、第九章においてルドン店内で悠一から強いられた「幸福そう」な演技をすることの難しさに当惑した。しかし、そんな感情とは裏腹に、俊輔は「幸福そうな表情」を無意識に浮かべていた。この「幸福そうな表情」は、俊輔の内面の変化が外面に現れた、いわば副産物のようなものだった。そして、「幸福そうな表情」を浮かべた理由を、俊輔は直ぐに認識することとなる。その切っ掛けは、悠一が外国人の男に誘われていた最中に「微笑を含んだ一瞥」を俊輔に向けた時である。次にその場面を引用する。

『嫉妬ではなからうか』と彼は自問自答した。『この胸苦しさと、澳のやうにくすぶる感情は』

(中略)

それは嫉妬だった。羞恥と憤怒のためにこの死人の頬は紅潮した。(第九章)

このように、俊輔は第九章のタイトル通り嫉妬したのである。多くの嫉妬を経験した俊輔ではあったが、悠一のことでは嫉妬したことは大きな変化だ。俊輔は同性愛者ではなかった。ましてや、今までに同性に惹かれたことも無かった。ところが、悠一と出会って彼の美しさに惹かれた。それだけでは無く、嫉妬という感情すらも引き出された。冷たいはずの「死人」に、嫉妬という熱が与えられたのである。第九章で俊輔の不安や疑惑が嫉妬から来るものであることが明示された。これにより、第五章での俊輔の「女を好きになつたのじやあるまいね」という言葉は、ただ復讐の失敗を恐れる気持ちから出たのではなく、悠一に執着し始めたからこそ出た言葉であることが証明された。

一方、第九章の対話時の悠一は、俊輔が悠一に恭子と会うよう指示している際の姿に次のような感想を持っている。

頬によみがへつてゐたであらう卑小な若さの醜さを、しかし悠一はもはや無縁のもの
と考へることはできなかつた。それは彼の強ひられた半面だった。(第九章)

この考え方から、悠一は俊輔の存在を自分の「半面」として捉えていることが伺える。俊輔とは違い美しい悠一であったが、俊輔の復讐の片棒を担ぐことで、その醜さをも取り込むことを強いられたのだった。俊輔が悠一に執着するのに比例するように、悠一は俊輔を受け入れざるを得なくなっていた。それは、復讐に協力する操り人形になることと同

義であり、「現実の存在」からかけ離れていくことであつた。その最たる例が、第十章で悠一が恭子に怒りを覚えた場面である。

俊輔の情熱がこのとき彼に乗り憑つてゐた証拠には、悠一は俊輔を憎むことを忘れてゐたのである。(第十章)

恭子と会う原因を作つた俊輔に怒るのでは無く、目の前に居る恭子に怒りを覚えた。これこそ、操り人形としての悠一の姿であつた。

その一方で、ナルシズムの開花の要因である「鏡」への親炙により、悠一には次のような習性が備わつていた。

鏡への異常な親炙のおかげで、いつの場合も自分の美を勘定に入れることを忘れない習性が既にそなはつてゐたのである。(第九章)

悠一は、俊輔の醜さを自身の「半面」と感じつつも、自身の美しさを十分に理解してゐた。この習性により、悠一は、本当の意味で俊輔を自身の「半面」とすることは無かつたと言えるだろう。何もかも俊輔の思い通り動くことが無かつたとはいえ、ここでの悠一の原動力は俊輔である。次に、悠一が俊輔の手について述べている部分を引用する。

悠一はこの古い衰へた手から、母親の蒼ざめてややむくんだ手を聯想した。不本意な結婚や悪徳や虚偽や詐術に対する情熱をこの青年の中に目ざめさせ、そのはうへと駆り立てたのは他ならぬこの二つの手である。死と身近な、死と默契を結んでゐるこの二つの手である。(第十章)

今の悠一を動かしているのは、自身の母親と俊輔である。この二人が、悠一を操り人形それも「万能な精巧な機械」にしたのである。しかし、決して俊輔が「万能な精巧な機械」としての悠一を生んだ訳では無い。俊輔は、悠一が持っていた性質を拾い上げて利用しているだけである。つまり、精神性が皆無である悠一に、自身の精神を重ねることで、操り人形のように悠一を利用しているだけなのだ。それとは逆に、悠一に出会つたことで、俊輔は生まれて初めての「思想」を宿した。そして、俊輔は次のような考えに行きついた。

芸術作品は自然同様に断じて「精神」を持つてゐてはならなかつた。いはんや思想を

や！精神の不在によつて精神を証明し、思想の不在によつて思想を証明し、生の不在によつて生を証明する。それこそは芸術作品の逆説的な使命である。ひいては美の使命であり性格である。(第十一章)

この考えを、俊輔はそのまま悠一に求めた。俊輔に宿った「思想」とは、悠一そのものになつていたのだ。そして、「大丈夫、この若者は俺の意のままになるだろう」という当初の考えのまま、俊輔は悠一に新たに宿った「思想」を求めた。しかし、悠一は俊輔に反旗を翻したのだ。それが、「僕はなりたくないです。現実の存在になりたいんです」という言葉だった。ここで、悠一は俊輔の操り人形などでは無いことが明らかになる。勿論、俊輔の命じるままに悠一は女たちと関係を持つてきた。行動という面では操られていたと言えるだろう。しかし、悠一の心は常に俊輔へ反抗し続けていた。俊輔の復讐心に同調して女を憎んだような時もあったが、その感情も、悠一の予想を裏切った女に向けられただけである。先にも述べたが、悠一は俊輔の醜さを自身の「半面」だと感じてはいても、自身の美しさを否定することは無かった。これは、俊輔の「半面」が悠一なのでは無く、悠一の「半面」が俊輔なのだと言ひ換えることができる。つまり、操っている側、主人は悠一なのである。俊輔は「現実の存在」になれない悠一が「現実の存在」となる為利用されたにすぎないのである。そして、それに俊輔が気づいた時には、悠一は「現実の存在」になりかけていた。

鏑木夫人からの手紙を読んだ後に俊輔と対峙した悠一は、「鏑木夫人を愛している」と俊輔に宣言した。これに対して、俊輔はいつも通り悠一の考えを否定したが、「現実の存在」になりかけている悠一は「以前のようには、こうしたお喋りにたやすく屈しなかつた。」のである。しかしながら、この時点では、悠一は俊輔に懐柔されてしまう。悠一は俊輔の意見を聞き入れ、「鏑木夫人を愛してゐる」ことを勘違いだと考えた。その理由を次に引用する。

『いやそんなことはない。やつぱり僕が鏑木夫人を愛してゐるなんてことはありえない。さうだ。僕はむしろ、夫人によつてそれほど愛されてゐる第二の僕、この世にありえないほど美しい一人の青年に恋心を抱いたのかもしれないんだ。あの手紙にはたしかにそんな魔力があつたし、誰だつてあんな手紙をもらつたら、その手紙の対象を自分だと思ふことは難しい。僕は決してナルシスぢやない』と彼は傲慢に弁解した。『もし僕に己惚れがあればあの手紙の対象を難なく自分と同一視するだろうが、己惚れがないばかりに、僕は《悠ちやん》を好きになつたんだ』(第二十章)

手紙を読んで「鏑木夫人を愛してゐる」と感じたのは、手紙に書かれた「《悠ちやん》」への愛を鏑木夫人への愛と取り違えたからだと言うのである。そして、「《悠ちやん》」を愛していると思ひ至った悠一は、俊輔に「雑駁な親しみ」を感じた。その理由を次に引用する。

俊輔も悠一も、同じものを愛していたからである。『君は僕が好きだ。僕も僕が好きだ。

仲良くしませう』——これはエゴイストの愛情の公理である。同時に、相思相愛の唯

一の事例である。(第二十章)

悠一は、自分と俊輔を「人形遣ひ」と「人形」では無く、同じ人物を愛している同志と考へた。ここで、俊輔と悠一の関係性の認識の違いが明らかになった。俊輔は自身のことを、悠一を操る「人形遣ひ」だと考へていた。しかし、時間が経つにつれて俊輔が悠一の「人形」になっていると感じている。それは、俊輔の「どうもこの頃では人形が私で、人形遣ひは君のはうらしい」という言葉からも明らかである。ところが、悠一は俊輔を操っている気など毛頭ない。なぜなら、悠一は自身が他者へ影響を与えているとは思っていないからだ。無意識に周りを変化させてしまう。それこそ、彼の美しさが持つ力なのだ。その力について俊輔が語っている箇所を引用する。

君はラヂウムだからだ。放射性物質だからだ。思へば私は、永いことそれを怖れてゐた。(第二十六章)

この言葉は、悠一の見えない力に侵されていく恐怖を言っているのではないだろうか。美しさそのものは、決して怖れるものではない。ところが、悠一の美しさは、人を魅了し、相手の意図しない行動や感情を引き出すのである。それを俊輔は「ラヂウム」「放射性物質」といった言葉を用いて表現したのだ。そして、この力が俊輔に与えた最たる影響は、俊輔の最期に集約される。それが、俊輔の死である。俊輔の死は、「現実の存在」になりかけている悠一を自分の傍に引き留めておく為の最終手段であった。では、何故俊輔の死が悠一との関係が続ける為の最終手段だったのだろうか。それを示すのが、俊輔が残した「一千万円に近い不動産・動産その他の財産」だった。俊輔と悠一の関係の始まりは俊輔が悠一に渡した「五十万円」だ。つまり、二人を繋ぐのは、お金だけだということだ。悠一から「五十万円」を返されれば、俊輔は悠一と何の関係も無くなってしまう。例え、更に悠一

にお金を渡したところで、悠一が受け取らない、受け取ったとしてもいつか返されるのではないかという不安が付き纏う。つまり、生きている限りにおいて、悠一が離れてしまうのではないかという不安は解消されない。だからこそ死を選んだのである。勿論、何も策を練らずに死ぬだけでは、意味はない。現実ですら「鑿跡一つ」悠一に残せないにも関わらず、「死人」である俊輔が悠一に何かを残せるはずはない。そこで、「一千万円に近い不動産・動産その他の財産」を悠一に全て譲り渡すのである。これにより、悠一は「五十万円」のみならず、「二千万円に表現された俊輔の愛に、一生縛られること」になった。これにより、俊輔の悠一への愛は完結した。

第二節 悠一と女たち

ここからは、俊輔の復讐の対象となった女たちについて考察していく。俊輔同様に悠一に翻弄された彼女たちが悠一から受けた影響を考察することで、悠一について、ひいては『禁色』の主題についても解明できるはずである。

女たち、特に鏑木夫人に悠一が与えた影響は大きい。その影響を考察する前に夫人の人物像をまとめておく。まずは俊輔による女性観を引用して夫人の人物像を探ることとする。

俊輔が恋し裏切られる女は、彼の唯一の長所であり唯一の美でもあるところの精神性を、頑として理解しない女に限られてゐた。そしてそれは本当の女、真正正銘の女であつたのである。俊輔は美しい女をしか嘗て愛さず、己れの美に自足し、精神性によつて何ら補はれる必要を認めないメッサリイヌをしか愛さなかつた。(第一章)

俊輔の女性観から言えば、鏑木夫人は「本当の女、真正正銘の女」である。それは、彼女が「精神性を、頑などとして理解しない女」だったからだ。

次に悠一の夫人への評価を引用する。

悠一はこの噂に蝕まれた女のまことの孤独の姿を見た。彼は何故かしら夫人が彼自身とそつくりだと感じた。(第五章)

精神性を理解しない性質に対して、悠一は「何故かしら夫人が彼自身とそつくりだと感じた」のだ。それは、精神性を持たない悠一が夫人の精神性の皆無を感じ取ったからである。

次に、鏑木夫妻の関係について本文を引用して整理する。

鏑木夫人は傍らの良人を見た。

十年来ただの一度も臥床を共にしない良人である。彼が何をしてゐるのか誰も知らない。夫人も敢て知らうとしない。

(中略)

この夫婦を結びつけてゐる愛情は、夫婦愛の模範的なもの、つまり共犯の愛情だったのである。(第六章)

「十年来ただの一度も臥床を共にしない」だけでなく、「この夫婦を結びつけてゐる愛情は、夫婦愛の模範的なもの、つまり共犯の愛情だった」と語られていることから、二人の関係が冷め切っていることは明らかである。しかし、この冷めきった関係は、夫婦の間だけでは無い。鏑木元伯爵も鏑木夫人も、自身の浮気相手とも割り切った関係を築いている。その冷静な態度故に、どちらの場合においても主導権を握るのは鏑木夫妻側だった。このように、人間関係、中でも愛情を伴う関係において、夫妻は冷静さを欠くことはなかった。しかし、そんな夫人に変化が訪れる。次に夫人の変化について俊輔が語る場面を引用する。

「鏑木夫人の目のうるみ方に君は気がついたかい。おどろいたことにあの女が精神的になつてしまつた。おそらく精神などと縁を持つたのは生れてはじめてだらう。それといふのも、恋のふしぎな補足作用で、君が全く精神をもたないことの反作用が現はれたんだ。私にも少しづつわかつて来たが、君は女を精神的には愛せると思つてゐるが、それは嘘だ。人間はそんな器用な手妻は出来はしない。君は女を肉体的にも精神的にも愛せないのだ。君は自然の美が人間に君臨するのと同じやり方で、つまり精神の完全な不在によつて女に君臨するんだ」

(中略)

「人間は誰でも自分の齒の立たないものがいちばん好きだからね。女だつてさうだ。けふの鏑木夫人は恋のおかげで彼女自身の肉体的魅力なんてすっかり忘れてしまつたやうな顔をしてゐるよ。こいつは昨日まで、どんな男よりも彼女にとつて忘れ難いものだったんだ」(第六章)

俊輔が語るように、夫人は悠一からの影響で「精神的になつてしま」い、恋への姿勢が

大きく変化していた。

以上のことを念頭に置き、何者にも左右されなかった鏑木夫人が精神を持ったことで起きた変化について考察していく。

最初に現れた変化は、「嫉妬」の出現である。夫人は、悠一と出会うまで嫉妬というものをしたことが無かった。そんな夫人が嫉妬故に起こした失態について次に引用する。

「あたくし待合せの時刻よりすこし早く来てみたのよ。お話がすむまでと思つて御遠慮してをりましたの。御免あそばせ」

と鏑木夫人が言つた。この瞬間、丁度若すぎる化粧が老いを目立たせるやうに、夫人はこんな小娘のような嘘をつくことで、自分の年齢を目立たせてしまった。恭子はこの年齢の醜さを見て安堵した。心の裕りが夫人の嘘を見抜かせた。彼女は悠一のはうへ片目で笑つてみせた。

鏑木夫人ほどの人が、十歳も若い女の軽蔑の目くばせに気づかなかつたのは、その場の嫉妬が彼女の矜りを失はせてゐたからである。(第十章)

この夫人の失態は、「心の裕りが夫人の嘘を見抜かせた。」というように、恋敵である恭子に余裕を生んだ。更には、恭子の「軽蔑の目くばせ」にすら気付かなかつた夫人は、紛れも無く「嫉妬」によつて動かされている。「嫉妬」とは、精神を持たない夫人が持つはずもなかつた感情である。悠一は夫人に精神を与え、「嫉妬」という感情を与えたのである。その後、夫人は悠一と自身の夫とが交わる現場を目撃し失踪する。すると、失踪した先で夫人に新たな変化が起こつた。その変化を夫人の悠一宛ての手紙から読み取ることができる。その正体は、悠一への〈母性〉の芽生えだった。嫉妬という感情から、母性という感情に変化していたのである。その変化の過程について本文を引用しながら考察していく。失踪先で死のうとしていた夫人であつたが、一転、生きることを決意した。その原因とは何か。それは、夫人に次のような意識の変化が起こつたからである。

死ねないとなると、考へは逆転して、彼女を死なさうとした原因そのものが、今度よりは、彼女を生かさうとしてゐる唯一の原因のように思ひなされ、今では悠一の美しさよりももつと劇しく、彼の行為の醜さが、夫人を魅了するにいたつてゐた。その結果、あのときほど、見られた悠一と見た彼女とが、同じ感情を、すなはち嘘いつはりのない絶対的な羞恥を、頒け合つてゐると感じられたことはなかつたとまで、平気で考へ直すことさへできた。

あの行為の醜さは悠一の弱点だらうか？ さうではない。鏑木夫人のやうな女が弱さを愛することは考へられない。あれは悠一が彼女に対してもつてゐる権力の、彼女の感受性に対するもつとも端的な挑戦でしかなかった。かうして夫人は、はじめおのれの情念と考へてゐたものが、さまざまなきびしい試煉を経て、意志に形を変へつつあるのに気づかなかつた。私の愛にはもう片鱗のやさしさもない、と彼女は奇妙な反省をした。その鋼のやうな感受性にとつては、悠一が怪物に近づけば近づくほど、それだけ愛する理由が増したのである。(第十九章)

こうして、美しい悠一の醜い部分を目撃した夫人は、その醜さにこそ愛情を注ぐに至つたのだ。つまり、息子を愛する母親のような心境になつたのである。そして、醜さを愛するあまり、自身の醜い部分を悠一にさらけ出すように自身の過去を手紙に綴つた。失踪した先で〈母性〉が芽生えた夫人は、悠一を救う救世主として悠一の前に舞い戻つた。以降から、〈母性〉によつて行動する夫人について本文を引用しながら考察していく。

悠一の元へ戻つた夫人は「彼の母親よりもはるかにすばやくこの青年の苦悩をすぐさま直感」すると、悠一を危機から救うべく直ぐに行動をおこした。それは、以前の夫人からは想像出来ない強引なものだった。次に夫人の行動を挙げる。

他人の家のなかへ嵐のやうに乗り込み、礼節も体面も思ひ遣りも羞恥もかなぐり捨て、自他に対して心ゆくばかり残酷になり、ひたすら悠一のために超人的な力業を敢てした(第二十九章)

この夫人の行動は、母親が息子を思うあまりに起こす行動と同じ強引さを持つて行われた。この夫人の態度を受けて、悠一の母親は次のような反応を返した。

傍若無人なこの分別の明快さに、南未亡人は頭を下げた。鏑木夫人には、ともかく犯しがたい気品があつた。未亡人は母親の特権を放棄した。そして夫人の中に、自分よりももつと母親らしいものを見出してゐる彼女の直感に正しかった。彼女は自分が世にも滑稽な挨拶をしてゐるのに気づかなかつた。

「悠一のこと、どうかよろしく願ひいたします」(第二十九章)

夫人の強引な行動は、「悠一のこと、どうかよろしく願ひいたします」という悠一の母の言葉によって正当化されてしまう。言い換えれば、母親の役割が夫人に譲渡されたの

である。夫人の〈母性〉が実母のそれを凌駕した瞬間であった。

次に、夫人に「母性」が芽生えたことについての各所の見解を引用する。中元さおり氏は夫人が変化することで、「悠一の庇護者的な立場に移行していく」と指摘し、夫人の「母性」は「康子の自己犠牲的な〈聖母性〉とは異なる、鏑木夫人の「母性エゴイズム」であるとしている。また、田中美代子氏も「邪悪な母性は、一転して庇護者に変貌する。」^(註4)というように指摘されている。悠一が与えた夫人の変化は、結果的に高橋新太郎氏が言う「母性的なるものに救済されることによって性的偏向を維持しつつ、男色たる烙印を免れる康子との結婚維持を望む巧智の持主として存在する。」^(註5)という形で悠一を救うことになる。

次に、夫人に生じた〈母性〉について考えておく。第一章において、俊輔は〈母性〉について次のように語っている。

母性がときどき展開してみせるびつくりするほどの崇高さも、実は精神と何の係累もないものだ。単なる生物学的現象にすぎず、動物の母性に見られる犠牲的愛情と何ら質的な差異のないものだ。(第一章)

俊輔の考えによれば、〈母性〉とは決して「精神」から生じるものではない。では、何故「精神」を持った夫人に〈母性〉が生じたのか。それこそ、悠一の持つ現実への影響力の賜物であると言える。

ここで、夫人の〈母性〉の出現理由を探る上で、一つの可能性を考えてみる。それは、夫人の〈母性〉は、俊輔の言う「精神と何の係累もない」〈母性〉とは本質を異にしたものではないかというものだ。この可能性を挙げた根拠は、悠一との旅の最中、夫人が葛藤していることから見て取れる。

『もし唇を触れたが最後、何かが羽音を立てて飛び去るだらう。二度と還つて来ないだらう。いつまで終わらない音楽のやうなものを、この美しい青年との間に保つには、指一つうごかしてはいけないんだわ。夜も昼も息をひそめ、二人のあひだに塵ひとつでも動かないように気をつけなければいけない』(第二十章)

これは、悠一が「無上の信頼」のもと夫人の前で無防備に眠っている場面である。ここで夫人は、悠一の唇に自身の唇で触れようと顔を近づける。しかし、先に挙げたような予感から、何もせずに眠りにつく。その理由は、この葛藤以前に夫人が次のように決意していたからである。

悠一の住んでゐる觀念の中にだけ住み、悠一の見てゐる世界だけを信じ、彼女の希望がほんの一分でもそれを歪めることを自ら戒めてゐたのである。(第三十章)

この戒めこそ、夫人の〈母性〉を物語っているのではないか。女を愛さない悠一の傍に居る為、夫人は嫉妬や欲望を押し込めたのだ。そうして、母親以上に悠一の全てを肯定する庇護者となることで、誰よりも悠一の傍にいようとしたり。つまり、俊輔の言う〈母性〉とは異なり、夫人のそれは、欲望を伴わない精神的愛情へと昇華させるためのいわば手段としての〈母性〉だったということだ。

以上のことから、夫人は悠一の持つ現実への影響を確かに受け、「嫉妬」そして「母性」という内面的変化が起こったことがわかった。

続いて、恭子について考察していく。恭子も鍋木夫人同様、俊輔の復讐の対象であり、「精神性」を理解しない「正真正銘の女」であった。彼女は「真摯の皆無」そして「軽さの宿命」と言う、俊輔とは全く異なる性質を持った女であった。

第十章において、悠一は俊輔の指示した靴屋で恭子と会う。しかし、予想とは裏腹に悠一よりも目の前の靴に興味を示した恭子は、悠一に素っ気ない態度を返した。そんな恭子に対して、悠一は次のような感情を持つ。

彼はその女を憎んだ。俊輔の情熱がこのとき彼に乗り憑つてゐた証拠には、悠一は俊輔を憎むことを忘れてゐたのである。(第十章)

つまり、悠一は事の発端である俊輔を憎むのでは無く、俊輔の予想と違う態度を取った恭子を憎んだのである。前章で俊輔の存在を自分の「半面」と捉えたことが、このような感情を呼んだと考えられる。そんな悠一には、この章でも「鏡」の影響が色濃く出ている。その場面を次に引用する。

悠一は辛さうな表情をした。この種の臨機応変が、ほとんど工みのあとを感じさせない演技が、彼の第二の天性となつたについては、無言の師である鏡の力に拠るところが多かつた。鏡は彼の美貌のさまざまな角度や陰影が物語る多様の感情の表現について彼を陶冶した。やうやく美は、意識によつて悠一自身から独立し、自在に駆使されうるやうになつたのである。(第十章)

自身の美を認識し、「美を勘定に入れることを」覚えた悠一は、その美しさを遺憾なく發揮する術を手に入れた。これは、見られる存在として成長している証拠である。結果、悠一は「自分の存在を、万能の精巧な機械のように感じ」た。これは、悠一自身が望む「現実の存在」から遠い位置に居ることを示している。俊輔との共犯関係は、悠一をますます「現実の存在」から遠ざけていった。

そうした悠一の演技と俊輔の指示により、恭子は「誤算を犯し」てしまった。それは「悠一の心は以前から彼女のほうへ近づいている。」という誤算である。なぜなら、近づいたのは恭子の方だからであるそれがわかる場面を次に引用する。

二人とも恭子の忘れ物を、ただの一足の靴だとしか考えてゐない。その実恭子が置き忘れたのは、悠一に会ふまで今日一日の彼女の生活の唯一の関心事であつた或るものだつたのである。(第十章)

恭子はこの僅かな時間で、その日一番の関心事を靴から悠一へと変えられてしまった。俊輔の考える復讐に見事に溺れたのだ。恭子の存在により、悠一はより一層俊輔の「傀儡」として進化していった。

恭子の変化と鏑木夫人の変化の違いは何か。それは、俊輔の思惑通りか否かだ。先に述べたように、夫人の変化の最終形は「母性」である。それは、俊輔の思惑を逸したものであり、俊輔の復讐が達成されない要因になった変化である。そして、俊輔と悠一の共犯関係に溝を生む存在へと変貌した。一方恭子の変化は、俊輔の思惑通りのものであり、復讐は見事になされた。つまり、二人の共犯関係をより強固な絆にする存在であつた。言うなれば、恭子は悠一を俊輔の「傀儡」へと導き、「現実の存在」になることを阻止していたのである。しかし、夫人は母性によって俊輔の「傀儡」であつた悠一を解放するに至つた。これにより、恭子の影響は無に帰してしまつた。夫人は悠一の救世主になつたことで、絶望の淵から蘇ることに成功した。これにより、悠一の傍に居ることを許されたのである。しかし、恭子は俊輔の復讐の餌食となり、その後の彼女について描かれることはなかった。作品内の二人の役割の違いが、二人の結末の違いに繋がつたと言えるだろう。

では、同じ復讐の対象者、悠一の妻である康子はどうだろうか。

康子は物語の冒頭で登場し、俊輔と親密な関係である様子が描かれている。しかし、康子は俊輔を蔑んでいた。そして、俊輔もそれを理解していた。そんな関係から、俊輔は康子に最も重い復讐を企てた。それが、悠一との愛の無い結婚だつた。

もともと、康子は年相応の考えを持つ娘である。愛する悠一との結婚で幸せになること

を疑わない、一般的な若い娘である。しかし、そんな康子が悠一と関わることで、娘から妻へ、そして母へと立場を変える。以降から、康子の精神的变化について本文を引用しながら考察していく。

結婚して直ぐに開かれた「月例の慈善舞踏会」で悠一の変化を見て取り「新婚勿々の良人の変化を康子が悉く自分に結びつけた」とあることから、康子は自身と悠一の幸せを疑っていないことがわかる。そして、その思い込みから、悠一との旅行の際に何もなかった三晩を次のように解釈していた。

さうだ。彼女は新たに獲た論理の力で疑問を解いたのであつた。かつて悠一のK町での憂鬱な様子から不安と不吉な予感をさへ抱いた康子であつたが、結婚後それを思ひ返すと、彼女は何事もおのが責に帰する初心な少女の自負も手伝つて、彼が眠られないほど思ひ悩んでゐたのは彼女が進んで許さうとしなかつたせゐだつたと決めてしまつた。さう思つてみれば、悠一にとつて無限に苦しいものであつた何事もなかつたあの三晩は、彼が康子を愛してゐるといふ最初の証明になつたのである。あるとき悠一は欲望と闘つてゐたのにちがひない。

並々ならぬ自尊心の強いこの青年は、はねつけられるのを怖れてじつとしてゐたのにちがひない。身を固くして、石のやうに押し黙つてゐる初心な少女に、たうとう三晩も手を出せなかつたといふこと以上に、悠一の純潔さを証明するものはないことが、康子にははつきりわかり、許嫁時代の悠一に他の女があるのではないかと考へた過去の稚ない疑ひを、今は嘲笑したり蔑んだりしてたのしむ権利を克ち得たやうに思つたのである。(第六章)

このように、悠一が「女を愛せない」が故に何もなかつた三晩が、康子には悠一が「康子を愛してゐるといふ最初の証明」として映つたのである。つまり、悠一の考えは康子には全く逆の意味で捉えられてしまつたのだ。その後も康子の誤解は解かれない。第十章で康子が男に乱暴されそうになつた所を助けた悠一に、康子は「彼の愛を十全信じ」ていたが、悠一が康子を守つた理由は次のようであつた。

理由は二つあつた。一つはあの学生が美しかつたからである。二つは、——悠一にとつてこれ以上云ひ難い理由はあるまいが——、あの学生が女を欲したといふ事実の辛い直視を悠一が強ひられたからである。(第十章)

またも、悠一が「女を愛せない」故の行動が康子に幸福をもたらした。作品前半では、悠一の苦悩と反比例するように、康子の幸福が強まっていった。そうして、第十章の最後の一行において、悠一の更なる苦悩の予兆が「……さて、十月、康子は月経を見なかった。」という言葉で示される。康子の懐妊である。しかし、ここで幸福に包まれていた康子が一転して苦悩の日々を過ごしていくこととなる。そして、苦悩に慣れた康子に変化が訪れる。

康子は苦しみに疲れると、いつか苦痛の習慣に慣れてしまつて、じつと聴耳を立ててゐる聡明な小動物のやうになつた。(第十四章)

苦悩と無縁であつた康子が、懐妊を期に苦悩を知り「聡明な小動物」のように、苦悩に對して敏感になつたのだ。この変化によつて、悠一の苦悩を理解しなかつた康子が、悠一の苦悩について理解し始める。康子が捉えた悠一の苦悩を具体的に語っているのが、次の場面である。

良人の放蕩が享樂ではないといふ考へ、それが彼の得体の知れない苦しみの表現に他ならぬといふ考へ、この母性的な考へには大人ぶつた感傷の誤算があつた。

(中略)

『何かわからないものが、あの人を苦しめてゐるんだ』と彼女は考へた。『まさか革命をやるうとしてゐるのではないだらうな。もし何かを愛して私を裏切つていらつしやるなら、あんな昂然とした憂鬱が、いつもお顔に漂つてゐる筈はない。悠ちやんは決して何ものをも愛してはおいでにならない。それは妻として私には本能的にわかる』

康子の考へは半ばは正しかつた。悠一が少年たちを愛したといふことはできない。

(第十四章)

ここで、康子に「母性的な考へ」が現れる。しかし、康子の母性は「大人ぶつた感傷の誤算」が内在しており、鏑木夫人の実母をも凌駕するそれよりも幼稚なものである。康子の考へで最も注目すべきは、「悠ちやんは決して何ものをも愛してはおいでにならない。」という部分である。引用部分にもあるように、康子のこの考へは「半ばは正しかつた」と言えるだろう。何故なら、「悠一が少年たちを愛したといふことはできない」からである。悠一が「女を愛せない」が故に起きた出来事を全て「彼が康子を愛してゐるといふ」証拠としていた康子が、悠一の苦悩の本質を捉えたのだ。これは、先に挙げた鏑木夫人や恭子は気づくことのなかつた事実である。何故康子だけが気づいたのか。その答えを、康子は

「妻として私には本能的にわかる」と語ることで示している。悠一の救世主である鋪木夫人でも、悠一を復讐者として駆り立てた恭子でも無く、悠一の妻という立場の康子だけがそれに気づくことができたのだ。悠一の苦悩の本質を臆気ながら的確に捉えた康子は、その苦しみを取り除く力を持たない自分を不甲斐なく思っていた。しかし、その考えも康子が更に「苦痛の習慣に慣れて」しまうと、心の中から消えてしまう。康子は「外側の世界は単なる余剰」と言つて興味を示さず、「自分の内部にしか興味を持たなくなつて」しまつたのだ。康子が「じつと聴耳を立てている聡明な小動物」であつた間の不安は姿を消し、「まことに平穩で、ほとんど幸福といえる」生活を送るようになったのである。

外側の世界の影響を受けない康子は、悠一が「女を愛せない」人間だと密告する手紙を受け取つた際も、冷静なままであつた。次に、手紙を受け取つた悠一の母と康子の会話を引用する。

南未亡人は、突然、自分と膝をつき合わせてゐる康子の面上に、すこしも動揺の色のないのに気づいた。

「あなたつて存外落着いてゐるのね。ふしぎですね。当の悠一の奥さんのあなたが」
康子はすまなささうな身振をした。自分の平気な様子が姑を悲しませたのではないかと惧れたのである。姑は重ねて言つた。

「この手紙がみんな嘘だといふわけでもないだらうと私は思ひますよ。もし本当だつたとしても、平気であられて？」

この矛盾にみちた詰問に、途方もない返事をした。

「ええ。どうしてだか、あたくし、そんな気がいたしますの」

未亡人は永いこと黙つてゐる。やがて目を伏せて、かう言つた。

「あなたが悠一を愛してゐないからでせうね。尤も、悲しいことに、今では誰もそれを責める資格はなく、むしろそれを不幸中の幸ひだと思はなければならぬだけだ」

「いいえ」と康子は殆ど喜ばしげにきこえる決断の調子で言つた。「さうぢやございませんわ、お姑さま。反対なのよ。だから却つて……」

未亡人は若い嫁の顔の前にたじたとつた。(第二十八章)

作品序盤の康子であれば、絶望と共に軽蔑を持つて密告の内容を受け取つたであろう。しかし、今の康子は悠一が男色であつたとしても怒りも悲しみも感じはしなかつた。それは何故か。その理由は、義母の「あなたが悠一を愛していないから」と語つたのに対して、

康子が「反対なのよ。だから却つて……」と返していること及びこの時の康子の考え方から推測できる。「この時点で康子は、「外側の世界は単なる余剰」と考えるようになっていいる。つまり、外側の世界に無頓着である為に、悠一が何を愛そうと頓着しなかったのだ。これは、康子の愛が見返りを求めない愛であることの証明である。そんな康子は、姑が密告の手紙を悠一に突き付けた際に、悠一への愛によって行動を起こした。次にその場面を引用する。

……康子がしめやかに泣き出した。

日頃涙を見せたがらないこの愛の忍従に馴れた女が、今少しも悲しくないのに、泣いてゐる自分を訝つてゐた。そしていつも見せない涙は、良人に嫌はれることを慮つてだが、今の涙は、この場の良人を救ふことを知つてゐて、流れてゐることに気附かなかつた。彼女の生理は愛のために訓練されて、愛のために功利的にさへ働らくにいたつてゐたのである。(第二十八章)

康子は、悠一への愛によって良人を救う涙を流した。先にも述べたように、康子は悠一からの見返りを求めていない。それ故に、「愛のために訓練され、愛のために功利的にさえ働らく」康子を作りあげた。ここまでを取り上げると、先に引用した中元さおり氏の言う「聖母性」^(註6)が康子に宿っているように見えるが、康子が考える「まことに平穩で、ほとんど幸福といえる」生活に悠一が存在している限りにおいてのみ、その愛は向けられるのである。悠一を救済に来た鏑木夫人とのやり取りを受けて、悠一を自身の幸福に必要な人間では無いと康子は判断した時、聖母のような愛情は悠一へと向かわなくなった。つまり、無償の愛とも取れる康子の愛が変貌してしまったということである。次に、康子の悠一への感情が変貌した後の場面を引用する。

……康子は目をさました。眠りに重いその睫はひらいた。悠一はそこにいままで見たこともない康子を見出した。それは別の女だつた。(第三十一章)

夫人との旅行から帰宅すると、悠一への「愛のために訓練され、愛のために功利的にさえ働らく」いていた康子が別人のような顔をしてそこに居た。悠一は「康子を愛して」いてると確信し、今回の鏑木夫人による救済は「自分を救うためではなく、康子を救うために鏑木夫人を煩わしたと考え」ていた。しかし、鏑木夫人の救済は康子を良人のことを愛さない妻へと変貌させた。では、具体的に康子はどのような過程を経て変貌してしまつたの

か。康子の変貌の理由と過程を引用しながら考察していく。

康子は絶対的な世界を見捨てて、そこから降りて来てゐた。その世界に住んでゐたとき、彼女の愛はいかなる証明にも屈しなかった。悠一の冷たい仕打、彼のすげない拒否、彼の遅い帰宅、彼の外泊、彼の秘密、彼が決して女を愛さないこと、その証明の前には、密告状などは些々たるものである。康子は動じなかった。その向う側の世界に住んでゐたからである。(第三十一章)

康子は、悠一を愛するが故に「いかなる証明にも屈しなかった」が、それは、「いかなる証明」も「単なる余剰」の世界という別次元で起きていたからである。しかし、いかに「その向こう側の世界に住んでいた」康子にも、それら全てを受け止めきれなくなった。その切っ掛けが鏑木夫人による救済である。次に悠一が旅行に行っている間の康子の変化について具体的に語っている部分を引用する。

良人として多分親切すぎた悠一は、わざわざ鏑木夫人の力を借りて、妻をそれまで住んでゐた灼熱した静けさの愛の領域から、およそ不可能の存在しない透明で自在な領域から、雑然とした相対的な愛の世界へ引きずり下ろしたのである。康子は相対的な世界の証明にとりまかれた。彼女にとつて昔から既知のものでもあり、親しいものであつた、あのおぞましい不可能の壁にとりまかれた。そこに処する方法は一つである。何も感じないことである。何も見ず、何も聴かないことである。

康子は、悠一の旅のあひだに、新たに住まなければならなくなった世界の処世術を身につけた。自分に対してすら敢然と、愛さない女になつた。この精神的な聾啞者になつた妻は、一見はなほ健康やかに、派手な黄の格子縞のエプロンを胸からかけて良人の朝食に侍つてゐた。(第三十一章)

良人がその親切さで康子を守ろうとしたことで、康子の中での均衡が崩された。「灼熱した静けさの愛の領域」に居て「いかなる証明にも屈しな」いで愛を貫いていた康子を「雑然とした相対的な愛の世界」へ「引きずり落とす」のだ。そして、どれほど康子が耐えても彼女を愛さない良人への愛のみならず、「自分に対してすら敢然と、愛さない女になるに至つた。全てを愛で耐え忍んでいた妻は、全てを拒絶し「何も感じない」人形へと姿を変えた。そして、悠一が「僕がいちばんすきなのはやつぱり君なんだ」と康子に伝えたことにすら興味を持たなかつた。とうとう康子に「言葉は通じな」くなくなつていた。

以上の女性たちとの関係から、悠一の影響力の強さが窺える。楠木夫人は悠一の救世主として「母性」が芽生え、一つのことばに頓着しなかった恭子は悠一にのみ固執するようになった。そして、康子は、恋する娘から「何も感じない」人形へと変貌させられた。しかし、これほど大きな影響を与えながら、悠一は何一つ変わることは無かった。これこそ、悠一が「現実の存在」では無いが故の宿命と言えるだろう。

注

- (注1) 田中美代子「夜もすがらの旅路」『決定版 三島由紀夫全集』第三卷
新潮社 二〇〇一年二月 五頁
- (注2) 谷口美紀『禁色』——鏡の崩壊——「國學院大學大学院 文学研究科論集」
第二一号國學院大學大学院 一九九四年三月 一二頁
- (注3) 中元さおり「三島由紀夫『禁色』における〈もう一つの物語〉——女たちの交錯の様相——」『近代文学試論』第四十六号 広島大学近代文学研究会
二〇〇八年十二月 五七頁
- (注4) 田中美代子「三島由紀夫 神の影法師」新潮社 二〇〇六年十月 一一一頁
- (注5) 高橋新太郎『禁色』断章「解釈と鑑賞」57-9 至文堂 一九九二年九月
六九頁
- (注6) 先掲中元さおり「三島由紀夫『禁色』における〈もう一つの物語〉——女たちの交錯の様相——」五七頁

第三章 『禁色』の主題

これまで、悠一と周りの登場人物たちとの関係から、悠一の人物像及び本質について考察してきた。第三章では、第二章までで明らかになった悠一の人物像から、『禁色』の主題を説明していくこととする。

本論では、『禁色』の主題を説明する為に悠一の影響力と悠一の他者との違いを中心に考察した。その結果、悠一は他者へ大きな影響力を持っていることが明らかになった。また、作中の言葉を用いれば「作品」であり「見られる」側の象徴であった。この、他者にはない美しさを持つ青年の本質を、他者との関係から見出すことで、悠一と他の登場人物との違いが明確になる。その違いこそ、『禁色』の主題に繋がるのではないかと考えたからである。

ここで、本論での主題論に入る前に、先行研究における『禁色』の主題について整理していく。

『禁色』で一番印象的なのは、男色である。これを中野裕子氏は『禁色』における性——『仮面の告白』から流れた性の系譜——^(注1)において、『仮面の告白』から続くテーマと位置付けた。

『禁色』へと稜線を描く男色のテーマ、さらに三島のもつ性のモチーフが『禁色』で美として構築され死へと転化されて行く^(注1)

男色から性そして、その性が美に変わることがテーマだと述べている。しかし、多くの研究者からは『禁色』の主題とは捉えられていない。その中でも田坂昂氏は『三島由紀夫入門』において次のように述べている。

『禁色』には男色の世界が過剰なまでに描かれているが、にもかかわらず、それを主題としたいいわゆる男色小説ではない。^(注2)

また、柴田勝二氏も『三島由紀夫——魅せられる精神』において次のように述べている。

『禁色』は決して男同士の〈同性愛〉を主題として描いた作品ではない。^(注3)

このように、男色は主題ではないというのが定説である。また、渡辺みえこ氏は『禁色』を男と男の物語としながら、テーマについて次のように言及している。

女性抹殺の表現は、小説『禁色』(昭和二十六)では、それ自体がテーマとなり、男と男の緊密な物語が展開されている。^(注4)

「女性抹殺」の表現がテーマであり、男たちの緊密な物語はその結果生まれたものだということである。その他に挙げられてきたテーマについても整理しておく。『禁色』の第一部が完結して直ぐの「群像」昭和二十六年十一月号に掲載された『禁色』を読む^(注5)」において、埴谷雄高氏は次のように述べている。

『禁色』は青春の自己保存と憧憬のイロニーを、この上なく誠實に扱った作品である。^(注6)

第一部発表当時、批判的な評価が多い中で、埴谷雄高氏は数少ない肯定派として、このように述べた。ところが、第二章では俊輔が亡くなった後にも、もう一人の主人公である悠一は生きているという結末が待ちうけているのである。つまり、「青春の自己保存と憧憬のイロニー」を主題とするには、悠一の迎える結末から考えると些か主題としては不足しているように思える。そこで、悠一と俊輔の両者が対立していることに重点を置く考え方について整理する。

対立関係を中心にとみると、多くは精神と肉体の対立だと捉えることが多い。山田有策氏は「禁色——〈精神〉の敗北」において、次のように述べている。

自らの過剰な感受性と欠けている「肉体的な存在感」を客体として具体化し、それらの相対的関連を追い求めようとしたのである。^(注7)

また、先にも引用した田坂昴氏の『三島由紀夫入門』においても同様に『禁色』を次のように位置づけている。

「肉体と精神」の二元対立的世界を正面から扱った作品^(注8)

このように、肉体と精神という人間そのものを扱っている作品だと言うのである。それを課されたのが、悠一であり俊輔なのである。この二人に課せられたものを『禁色』の表

題から読み取ろうという試みもされた。ここで、再度柴田勝二氏の著書『三島由紀夫―魅せられる精神』を参考にする。次に引用するのは、『禁色』という表題そのものについて言及している箇所である。

「禁色」という作品の表題は、何よりもこの主要な登場人物にともに課された、性愛の行動に対して取らざるをえない二重拘束的な距離を示唆している。

(中略)

悠一と俊輔にとつて、同性愛と異性愛の可能性がともども付与されていながら、そこに自己を同一化させることが出来ない不如意が、この両義的な語に含意されているのである。^(注8)

肉体と精神を対立するように課せられた二人であつたが、「同性愛と異性愛の可能性」という点では、同じように裏切られていたということだ。裏切りという言葉からは多少逸れるが、佐藤秀明氏は「自己可視のモダニズムと三島由紀夫の〈反個性〉」において、悠一が悠一自身にも見放されていることを指摘している。

『禁色』は、自分と自分のイマージュとの間の同一性に、微妙な亀裂のあることを問題にしているのである。^(注9)

これは、本文中の「僕は《悠ちやん》を好きになつたんだ」という悠一の発言からも垣間見るができる。悠一はあくまで自身はナルシスでは無いと言い張っている。その原因は、悠一と《悠ちやん》を違う人物として認識するという現象が起こっていることにある。これこそ、悠一の中に「自分と自分のイマージュとの間の同一性に、微妙な亀裂」が存在している証拠である。そして、佐藤秀明氏は同書でこの現象を『所有権の混乱』した悠一のイマージュを、悠一自身が愛してしまうのである。^(注10)とまとめている。

先行研究における『禁色』の主題をまとめてきたが、これらを踏まえた上で、主題について述べていきたい。しかし、本論での主題論を述べる前に明確にしておきたいことがある。それは、『禁色』の主人公は誰であるかという問題である。

三島による「禁色」創作ノートによれば、『禁色』の主人公は俊輔である。先にも述べたが、悠一は三島の理想を詰め込んだ青年であつた。片や、俊輔は三島の現実を背負っていた。現実と言っても、当時の三島はまだ青年である。俊輔は、今の三島が作家として年老いた姿、つまり、何事も無ければいつか来る未来という意味での現実であつた。この二人

の立場を作品中の言葉を用いて言い換えるなら、「作品」と「作者」とも「見られる」側と「見る」側とも言える。現実であり「作者」及び「見る」側である俊輔が、『禁色』の主人公だと言うのである。しかし、物語の幕を引くのは悠一である。これは、俊輔から悠一の物語へと移行することを表しているのではないだろうか。人生を終えた俊輔から、悠一は主人公のバトンを受け取ったのだ。『禁色』という物語は、最後に俊輔の死後の悠一を描くことで、その後の世界があることを示唆しているのである。つまり、「作者」が消えようと「作品」は残るのだ。松永恵理子氏は、俊輔の死後である最後の場面について次のように述べている。

この作品で最も主体となるイロニーは、従来いわれてきたように俊輔の姿にあるのではなく、悠一の最後の姿に象徴されているのではないかと考える。^(注1)

最後の場面の悠一が描かれることに大きな意味があるのである。これらを踏まえた結果、『禁色』の主人公は俊輔であるが、最後に悠一へとその役割を譲っていると結論づけることとする。

主人公が明確になったところで、『禁色』の主題について考えていく。先に悠一を三島の理想であり「作品」及び「見られる」側であると定義した。同様に、俊輔を三島の現実であり「作者」及び「見る」側であると定義した。この二つが〈対話〉する物語が『禁色』である。

本論の第二章において、悠一と俊輔及び悠一と女たちの対話を考察したが、どちらにおいても悠一が他者に多大な影響を与えていたことがわかった。俊輔も作中で悠一に「君は現実には決して影響されないが、現実に対してはたえず影響を及ぼしてゐる。」と語っている。悠一は決して現実に脅かされることは無い。ところが、現実には悠一の影響を受け、自身を作り替えてしまうのである。これらの現象は、現実が理想を欲することで起きたと言える。現実の存在である女たちは、理想の権化である悠一を手に入れたいと願ったことで自身を変化させてしまったのである。一方で、俊輔は理想が誰かの手に、ましてや醜い自分のものになることを嫌悪した。その結果、遺産を悠一に託し死ぬことを選んだ。言い換えれば、理想を理想のままにする為に現実が犠牲になったということだ。一度は現実の存在になりかけていた悠一ではあったが、俊輔の死によって、悠一が「現実の存在」になる為に必要な俊輔の呪縛からの解放を阻止したのだ。表面上、あたかも理想が現実勝利したように見せながら、その実、理想は懇願していた「現実の存在」になる手段を失ってしまふという大敗を喫することとなった。実際は現実そして「作者」及び「見る側」の勝利

なのである。柴田勝二氏も『三島由紀夫——魅せられる精神』において次のように述べている。

自死することによって一見敗者として退場したように見える俊輔の方が、自己を委ねる対象を見出した点では勝利を収めている^{註12}

つまり、悠一は、「見る」ことを覚え、「現実の存在」になりかけていたにも関わらず、俊輔の呪縛によって完全なる「現実の存在」へと変貌することは叶わなかったのである。では、俊輔の呪縛とは何であろうか。物理的に言えば俊輔から悠一に渡った「五十万円」である。これは、俊輔と悠一の契約の象徴である。二人の契約とは、悠一の「見られる」側としての覚醒であり、俊輔の「作品」になった証拠である。この「五十万円」は、俊輔の理想を負うことと同義だ。現実と理想は対局にあり、誰かの理想である限り、悠一が「現実の存在」になることは叶わないのである。

『禁色』とは、三島の言う二人の「私」である悠一と俊輔に、理想と現実という対立物を付与し、最後には現実が理想の為に死ぬという結末を迎えた小説である。このことから、『禁色』が描きたかったのは、理想と現実の対立であり、「見られる」側と「見る」側の対立、「作品」と「作者」の対立だった。理想が残ることで、現実が勝利する。「見られる」側は絶えず「見る」側に影響を与えながら、「見る」側によって「見られる」ことを強要される。そして、「作品」は決して「作者」のものとはなり得ず、「作者」が消えても「作品」でありつづけてはならないのである。

現実の影響を受けない理想は、例え願望が叶わないという大敗を喫したとしても、その敗北に捕らわれ無い。物語の最後は、俊輔が死と「一千万円」いう形で悠一に与えた呪縛を、悠一は直ぐに紛らわしてしまうような様子が暗示されている。これこそ、現実の勝利の証である。俊輔は、理想だけが生き残り、恰も現実が理想に負けたように見せながら、何にも脅かされない理想としての悠一を残すことに成功した。悠一は「現実の存在」たちの前に「現実の存在」に成れないまま取り残されたのだ。

注

- (注1) 中野裕子 『禁色』における性―『仮面の告白』から流れた性の系譜―「国文目白」
28巻 日本女子大学国語国文学会 一九八八年十一月 一八一頁
- (注2) 田坂昂 『三島由紀夫入門』オリジン出版 一九八五年十二月 九一頁
- (注3) 柴田勝二 『三島由紀夫―魅せられる精神』おうふう 二〇〇一年十一月
一一七頁
- (注4) 渡辺みえこ 「完璧な美」・青春からの快癒―三島由紀夫『禁色』をめぐって―
「國學院雑誌」第九十八巻 第十一号 國學院大學 一九九七年十一月
一六七頁
- (注5) 埴谷雄高 『禁色』を読む 「群像」昭和二六年十一月号 卷六(十一) 講談社
一九五一年十一月 六四頁
- (注6) 山田有策 「禁色―〈精神〉の敗北―」 「解釈と鑑賞」 41・2 至文堂
一九七六年二月 一一七頁
- (注7) 先掲 田坂昂 「三島由紀夫入門」 九一頁
- (注8) 先掲 柴田勝二 『三島由紀夫―魅せられる精神』 一二九頁
- (注9) 佐藤秀明 「自己可視のモダニズムと三島由紀夫の〈反個性〉」
「日本近代文学」 57 日本近代文学会 一九九七年十月 一四三頁
- (注10) 前掲 佐藤秀明 「自己可視のモダニズムと三島由紀夫の〈反個性〉」 一四三頁
- (注11) 松永恵理子 「足」と「火事」との意味するもの―三島由紀夫『禁色』のあるア
スペクト― 「国文目白」 47巻 日本女子大学国語国文学会 二〇〇八年二月
六一頁
- (注12) 先掲 柴田勝二 『三島由紀夫―魅せられる精神』 一三三頁

結び

本論では、三島由紀夫が〈廿代の総決算〉と位置付けている『禁色』の主題について明らかにしていくことを目的としてきた。ここで再度、取り上げた問題及びその問題解明の為の考察方法について整理する。

まず、主題解明の為に何を考察すべきなのか。その手掛かりを作者が書いたエッセイ『禁色』は廿代の総決算』に求めた。次に、エッセイの一部を引用する。

「禁色」では「仮面の告白」や「愛の渇き」とは違って、自分の中の矛盾や対立物なりの二人の「私」に對話させようとした。^(注1)

この一文から、重要なのは〈二人の「私」〉であると設定した。その〈二人の「私」〉は誰と誰なのか。それについて、本論の第一章で考察した。その結果、〈二人の「私」〉とは、南悠一と檜俊輔であると結論付けた。続いて、どのような観点から考察していくのが望ましいのかという問題が浮上した。これについても、先に引用した一文に手掛かりを求めた。そこから、〈対話〉という言葉に注目した。そして、本論の第二章で〈二人の「私」〉つまり悠一と俊輔の〈対話〉を考察した。その結果、俊輔が主導権を握っているように見せて、その実、悠一が俊輔を振り回していることがわかった。これにより、悠一が俊輔及び現実の世界の人物に多大な影響力が持っていることがわかった。それこそが悠一の本質であり、主題を解明する重大な手掛かりなのではないかと結論づけた。

しかし、二人の〈対話〉のみを考察しても、悠一が現実に対して影響力を持っていることを証明するには不十分であった。そこで、他の人物と悠一の〈対話〉についても考察することにした。それが、悠一と女たちの〈対話〉である。

女たちとは、鏑木夫人、恭子、康子の三人である。『禁色』に登場する女たちは、程度の差はあるが、それぞれに作中で変化が起きている。その変化の原因が悠一にあるのかを考察した。その結果、鏑木夫人は初めての「嫉妬」を覚え、後に「母性」をも持つにいたった。恭子は、初めて一人の男に夢中になり、俊輔の思い通りに復讐の餌食となった。そして、妻である康子は、愛に溢れた少女から「愛さない女」というまるで人形のような人物へと変化した。これらの変化は、全て悠一から影響を受けた結果であるとわかった。悠一は、俊輔だけでは無く、康子たち女にも多大な影響を与えていた。この影響力は「現実の存在」では無い悠一が「現実の存在」である彼らに影響を与えたということの証拠であった。

第三章では、第二章で悠一と俊輔、悠一と女たちの二つの〈対話〉を考察したことで明らかになった悠一の本質から、『禁色』の主題を考察していった。ここで、『禁色』の主人公は誰かという問題についても考察した。本論では、主人公は俊輔であるとされた。しかし、『禁色』の幕を引くのは悠一である。このことから、俊輔の物語を最後に悠一が引き継いだのではないかと考えた。つまり、作品の主人公は俊輔であるが、俊輔が死ぬことで、悠一に主人公が引き継がれ、悠一の物語の幕開けを暗示したのではないかということだ。

『禁色』の主題を解明するにあたり、悠一と俊輔が担っていた役割を定義した。悠一を三島の理想であり「作品」及び「見られる」側、俊輔を三島の現実であり「作者」及び「見る」側であると定義した。この二つが〈対話〉する物語が『禁色』である。この相反する二つが〈対話〉することで明らかになったことこそ、『禁色』の主題なのである。『禁色』とは、三島の言う二人の「私」である悠一と俊輔に、理想と現実という対立物を付与し、最後には現実が理想の為に死ぬという結末を迎えた小説であった。このことから、『禁色』で三島が描きたかったのは、理想と現実の対立であり、「見られる」側と「見る」側の対立、「作品」と「作者」の対立だった。理想が残ることで、現実が勝利する。「見られる」側は絶えず「見る」側に影響を与えながら、「見る」側によって「見られる」ことを強要される。そして、「作品」は決して「作者」のものとはなり得ず、「作者」が消えても「作品」でありつづけなくてはならないのである。

注

(注1) 三島由紀夫『禁色』は廿代の総決算『決定版三島由紀夫全集』第二十七巻

新潮社 二〇〇一年二月 四七五頁

参考文献目録

テキスト

・三島由紀夫『決定版三島由紀夫全集』第三巻 新潮社 二〇〇一年二月

参考文献

- ・吉村貞司「三島由紀夫」東京ライフ社 一九五六年二月
- ・吉村貞司「三島由紀夫と美と背徳」一九六六年九月
- ・野口武彦「三島由紀夫の世界」講談社 一九六八年十二月
- ・いいだ・もも「三島由紀夫」都市出版社 一九七〇年十二月
- ・船橋聖一ほか「三島由紀夫の人間像」読売新聞社 一九七一年三月
- ・奈須田敬「わが友三島由紀夫―レポート・自決の心理と動機―」原書房 一九七一年八月
- ・水津謙二「病跡学的考察 三島由紀夫の悲劇」都市出版社 一九七一年十月
- ・平岡梓「伴・三島由紀夫」文藝春秋 一九七二年五月
- ・長谷川泉「彩絵硝子の美学」至文堂 一九七三年十一月
- ・平岡梓「伴・三島由紀夫(没後)」文藝春秋 一九七四年六月
- ・光栄莞夫「三島由紀夫論」五月書房 一九七五年一月
- ・福島鑄郎「資料総集 三島由紀夫」新人物往来社 一九七五年六月
- ・ジョン・ネイスン・訳 野口武彦「三島由紀夫―ある評伝―」新潮社 一九七六年六月
- ・戸田義雄 永藤武「よみがえる三島由紀夫―霊の人の文学と武と―」日本教文社 一九七八年十一月
- ・佐渡谷重信「三島由紀夫における西洋」東京書籍 一九八一年七月
- ・田坂昂「三島由紀夫入門」オリジン出版センター 一九八五年十二月
- ・秋山駿・他「群像 日本の作家」∞三島由紀夫」小学館 一九九〇年十月
- ・堀江珠喜「薔薇のサディズム―ワイルドと三島由紀夫―」英潮社 一九九二年四月
- ・吉村貞司「近代作家研究叢書118 三島由紀夫」日本図書センター 一九九二年十月
- ・島田亨「三島由紀夫解釈 初期作品を中心とした精神分析的考察」西田書店 一九九五年九月
- ・ネーサン・シュワルツ・サラント「自己愛とその変容 ナルシズムとユング派心理療法」新曜社 一九九五年十月
- ・猪瀬直樹「ペルソナ 三島由紀夫伝」文藝春秋 一九九五年十一月
- ・林進「三島由紀夫とトーマス・マン」鳥影社・ログス企画部 一九九九年五月
- ・西本匡克「三島由紀夫ダンディズムの文芸世界」暁印書館 一九九九年六月
- ・松本徹・佐藤秀明・井上隆史「三島由紀夫事典」勉誠出版 二〇〇〇年十一月

- ・三島由紀夫『禁色』創作ノート』『決定版三島由紀夫全集』第三巻 新潮社 二〇〇一年二月
- ・柴田勝二「三島由紀夫——魅せられる精神」おうふう 二〇〇一年十一月
- ・橋本治「三島由紀夫」とはなにもなかったのか」新潮社 二〇〇二年一月
- ・瀧田夏樹「川端康成と三島由紀夫をめぐる21章」風間書店 二〇〇二年一月
- ・出口裕弘「三島由紀夫・昭和の迷宮」新潮社 二〇〇二年十月
- ・松本徹「三島由紀夫エロスの劇」作品社 二〇〇五年五月
- ・上総英郎「三島由紀夫論」パピルスあい 二〇〇五年八月
- ・三島由紀夫『禁色』創作ノート2』『決定版三島由紀夫全集』補巻 新潮社 二〇〇五年十二月
- ・佐藤秀明「日本の作家100人 三島由紀夫——人と文学」勉誠出版 二〇〇六年二月
- ・田中美代子「三島由紀夫 神の影法師」株式会社新潮社 二〇〇六年十月
- ・井上隆史「△三島由紀夫論集△三島由紀夫 虚無の光と闇」試論社 二〇〇六年十一月
- ・松本健一「松本健一 伝説シリーズ2 増補・新版 三島由紀夫 亡命伝説」辺境社 二〇〇七年三月
- ・高橋和幸「三島由紀夫の詩と劇」和泉書院 二〇〇七年三月
- ・田坂昂「増補三島由紀夫論」風濤社 二〇〇七年六月
- ・杉山欣也「三島由紀夫」の誕生」翰林書房 二〇〇八年二月
- ・佐藤秀明「三島由紀夫の文学」試論社 二〇〇九年五月
- ・高山秀三「マンと三島 ナルシスの愛」鳥影社・ロゴス企画 二〇一一年三月

雑誌掲載論文

- ・埴谷雄高『禁色』を読む』「群像」昭和二六年十一月号 巻六(十一) 講談社 一九五一年十一月
- ・武田勝彦『禁色』論—西欧批評に答えて—「三島由紀夫 現代のエスプリ」至文堂 一九七一年三月
- ・奥野健男「三島由紀夫論」『日本文学研究資料叢書 三島由紀夫』有精堂出版 一九七二年七月
- ・田中美代子「三島由紀夫「禁色」〈男色〉」『解釈と鑑賞』477巻 至文堂 一九七三年二月
- ・石原慎太郎『禁色』試論 描かれざるカタストロフ』「国文学—解釈と教材の研究—」学燈社 一九七六年十二月号 一九七六年十二月
- ・山田有策「禁色—〈精神〉の敗北—」『解釈と鑑賞』41・2 至文堂 一九七六年二月
- ・桑原幹夫「マンと由紀夫—『禁色』と『金閣寺』の成立に於けるマンの影響について—」『帝京大学文学部紀要』9巻 帝京大学文学部 一九七七年十月
- ・篠田一士「日本の現代小説 11 『禁色』から『金閣寺』へ—「すばる」37巻

- 一九七八年十月
- ・神西清「ナルシシズムの運命」『鑑賞 日本現代文学 三島由紀夫』第二十三巻
角川書店 一九八〇年十一月
- ・先田進「『禁色』 試論―小説の小説」という側面から―」『学葉』22巻
金沢女子短期大学 一九八〇年十二月
- ・発田和子「発端としての『禁色』―三島由紀夫長篇小説の源流を求めて―」『日本女子大
大学院の会会誌』3巻 日本女子大大学院の会 一九八一年九月
- ・杉本和弘「『禁色』 論のための覚書―第一部と第二部の違いを中心に―」
『国語国文学論集』後藤重郎教授停年退官記念号 名古屋大学国語国文学会
一九八四年四月
- ・堀江珠喜「『禁色』と『ドリアン・グレイの肖像』」『比較文学』27 日本比較文学会
一九八五年三月
- ・菅原洋一「『禁色』という試み」『立正大学国語国文』22巻 立正大学国語国文学会
一九八六年三月
- ・山折哲雄「『禁色』と『豊饒の海』―装置としての輪廻転生」『ユリイカ』18・5
青土社 一九八六年五月
- ・杉本和弘「鏡と男色―『禁色』の一側面」『名古屋近代文学研究』4巻 名古屋近代文学
研究会(名古屋大学)一九八六年十二月
- ・上総英郎「三島由紀夫論(5)―『禁色』の架空美」『論究(二松学舎大学)』22巻
二松学舎大学佐古研究室 一九八八年三月
- ・上総英郎「三島由紀夫論(6)―『禁色』と『アポロの杯』」『論究(二松学舎大学)』
23巻 二松学舎大学佐古研究室 一九八八年六月
- ・中野裕子「『禁色』における性―『仮面の告白』から流れた性の系譜」『国文目白』
28巻 日本女子大学国語国文学会 一九八八年十一月
- ・高橋新太郎「『禁色』断章」『解釈と鑑賞』57・9 至文堂 一九九二年九月
- ・石原千秋「特集・三島由紀夫―物語るテクスト 身体論：パフォーマンス―(『太陽と鉄』
「ナルシシズム論」『禁色』ほか)『国文学』38・5 関西大学国文学会
一九九三年五月
- ・谷口美紀「『禁色』―鏡の崩壊―」『國學院大學大学院 文学研究科論集』第二二号
國學院大學大学院 一九九四年三月
- ・野口武彦「日本社会と『両性具有性』」『文学』6・1 岩波書店 一九九五年一月
- ・浅田彰「渡辺守章(へ対談) 同性愛のプロブレマティック」『文学』6・1 岩波書店
一九九五年一月
- ・小林幸恵「三島由紀夫研究―『禁色』における同性愛者像」『白門国文』12巻
中央大学国文学会 一九九五年三月
- ・イルメラ・日地谷・キルシュネライト・三島憲一・中山・ツイーグラ―・公子

- ・「トーマス・マン『ヴェニスに死す』と三島由紀夫『禁色』——一つの比較」
「文学」6・2 岩波書店 一九九五年四月
- ・柴田勝二「遊戯の崩壊——三島由紀夫『禁色』論」「叙説」12巻 敍説舎
一九九五年十一月
- ・長谷川洋「三島由紀夫の『禁色』とトーマス・マンの『ヴェニスに死す』覚え書き」
「横浜市立大学論叢（人文科学系列）」47・2 横浜市立大学 一九九六年三月
- ・佐藤秀明「自己可視のモダニズムと三島由紀夫の〈反個性〉」『日本近代文学』57
日本近代文学会 一九九七年十月
- ・渡辺みえこ「完璧な美・青春からの快癒——三島由紀夫『禁色』をめぐる——」
「國學院雑誌」第九十八巻 第十一号 國學院大學 一九九七年十一月
- ・岡村圭太「三島由紀夫文学における〈仮面〉について——福島次郎の著作に触れて——」
「芸術至上主義」二四巻 芸術至上主義文芸学会事務局 一九九七年十一月
- ・矢島道弘「作品の世界 『禁色』執筆過程の裏側——伝統文学への反噬」「解釈と鑑賞」
65・11 至文堂 二〇〇〇年十一月
- ・ニーナ・コルニエツツ「行為する欲望——三島由紀夫（1）——肉をテキスト化する、あるいは、（非）分節された欲望」「ユリイカ」32・14 青土社 二〇〇〇年十一月
- ・橋本治「続『三島由紀夫』とはなにもものだったのか」「新潮」98・2 新潮社
二〇〇一年二月
- ・ニーナ・コルニエツツ「行為する欲望——三島由紀夫（2）——ナルシズムとサディズム——ホモファシズムとしての三島」「ユリイカ」33・1 青土社 二〇〇一年一月
- ・橋本治「そして、『三島由紀夫』とはなにもものだったのか」「新潮」98・5 新潮社
二〇〇一年五月
- ・田中美代子「さまざまなる変容——『禁色』序説——」「三島由紀夫論集1 三島由紀夫の時代」
二〇〇一年三月
- ・梅津斉「三島由紀夫作『金閣寺』論——Doppelgänger 真犯人の研究——」
「方位」22巻 熊本近代文学研究会 二〇〇一年六月
- ・渡辺みえこ「異性愛（ヘテロセクシュアル）女性」への復讐と破壊——三島由紀夫『禁色』
の戦略」「買売春と日本文学」二〇〇二年二月
- ・梅津斉「三島由紀夫研究——文壇処女作『仮面の告白』を中心に」「方位」23巻
二〇〇二年十二月
- ・武内佳代「三島由紀夫『仮面の告白』という表象をめぐる——1950年前後の男性同性愛表象に関する考察」「F・GENSジャーナル」9巻 お茶の水女子大学21世紀
COEプログラムジェンダー研究のフロンティア 二〇〇七年九月
- ・松永恵理子「足」と「火事」との意味するもの——三島由紀夫『禁色』のあるアスペクト」
「国文目白」47巻 日本女子大学国語国文学会 二〇〇八年二月
- ・丹尾安典「いはねばこそあれ——男色の景色——第二章「連れ鳴く雁」」「新潮」105・2

- 新潮社 二〇〇八年二月
- ・丹尾安典「いはねばこそあれ——男色の景色 第六章「礼装」」「新潮」105(2)
新潮社 二〇〇八年六月
- ・重吉舞子「三島由紀夫『禁色』論——「不在」から「現実的存在」へ」
「金沢大学語学・文学研究」36巻 沢大学教育学部国語国文学会 二〇〇八年十二月
- ・中元さおり「三島由紀夫『禁色』における「もう一つの物語」——私たちの交錯の様相——」
「近代文学試論」第四十六号 広島大学近代文学研究会 二〇〇八年十二月
- ・長谷川洋「美は、死の方向にある」——マンの『ヴェニスに死す』に魅せられた二人「研」
研短歌会 二〇〇八年十二月